明治三十年一月三十日發行

女鑑



第百二拾五號

東京國光社

女鑑第百二十五號

目錄

松亭 墨

理慶尼



皇太后陛下の崩御をいたみ奉る詞

かけんはいとも畏こかれども、青山に宮しきまして、おはします　皇太后の宮陛下には、いにし十一日、かしこくもかみがくれせさせ給ふ。おんはじめの御ほどは、かりうめの御風氣にておはしましゝを、日をへて御病おもらせ給へば、上は、天皇　皇后兩陛下をはじめ奉りて、御心いためさせ給ひ、下は億兆の臣民みないかで一日だもはやく癒えませといのり奉り、醫のつかさも、あらゆるみわざをつくし奉りしも、如何なる神のまがことにかあらん。つひにかひあらせ給はずして、かんあがりましぬ。

天地もかなしみてか、空かきふたがりて、雪をさへに降らし、心なき草木もしをれかへりて、ふく風におとなふ聲も、おのづからにかなしげなり。九重の雲の上のれはんなげきいかばかりぞ。袞龍の御衣手いかにれはしますらんと、あふぎ奉るだに、胸まづふたがりて、かきくるゝ涙に、筆もなづみて、いはんすべせんすべも知らず。八州の内外、南は高砂の島根のさゝよりはじめて、北は千島の海のはてまでも、たれかは袖をしぼり奉らざらん。たゞかしこさに、とる筆もさだかならず。しひてかいつけて、奉悼の意を表し奉るになん。あなかしこ。

御大喪につきて

天地與、共將終登、念作、奉仕之、情違奴。

とむかしの人も悲みたりしごとく、吾人臣民が、かけまくも畏き、皇太后宮陛下の御喪を服し奉る不幸に遇ふに至りしは、いかなる禍津日の御神の御心にかいでたりけんと、たゞ哀痛悲悼の外なきなり。

さて、こたび、宮中の御喪は一年と定め給ひ、國民居喪の御制も定りて、三十日間御喪を服し奉るべき旨仰せ出されたり。是に於いて、吾人は、大に居喪の禮を講じ、臣民奉上の誠を盡くさんことを思ひ、敢て或は敬意を失ふことなからんことを期せざるべからず。

抑、我が國の　皇室は、他の國々の帝室の如きものにあらずして、實に吾人臣民の宗家にましく〱、天地開闢の初より、幾千萬年の後までも、かはらせ給ふこと

なきは、即、我が國體のいとも尊嚴なる所以なれば、吾人臣民は、皆その赤子たらざるはなく、皇室と臣民との關係は、實に離れ得べからざるものあることは、今さらに言ふまでもなきことなり。

されば、吾人臣民たるものは、つねに、皇室と一體となりて、その休戚憂喜を同うし奉らざるべからざること、千古一日の如く、毫もかはることあるべからず。故に、こたびの如き大變に遭ひ奉りては、最篤く誠敬の念を致し、決して他邦の儀禮に泥み、我が國の禮節を缺くが如きことあるべからず。

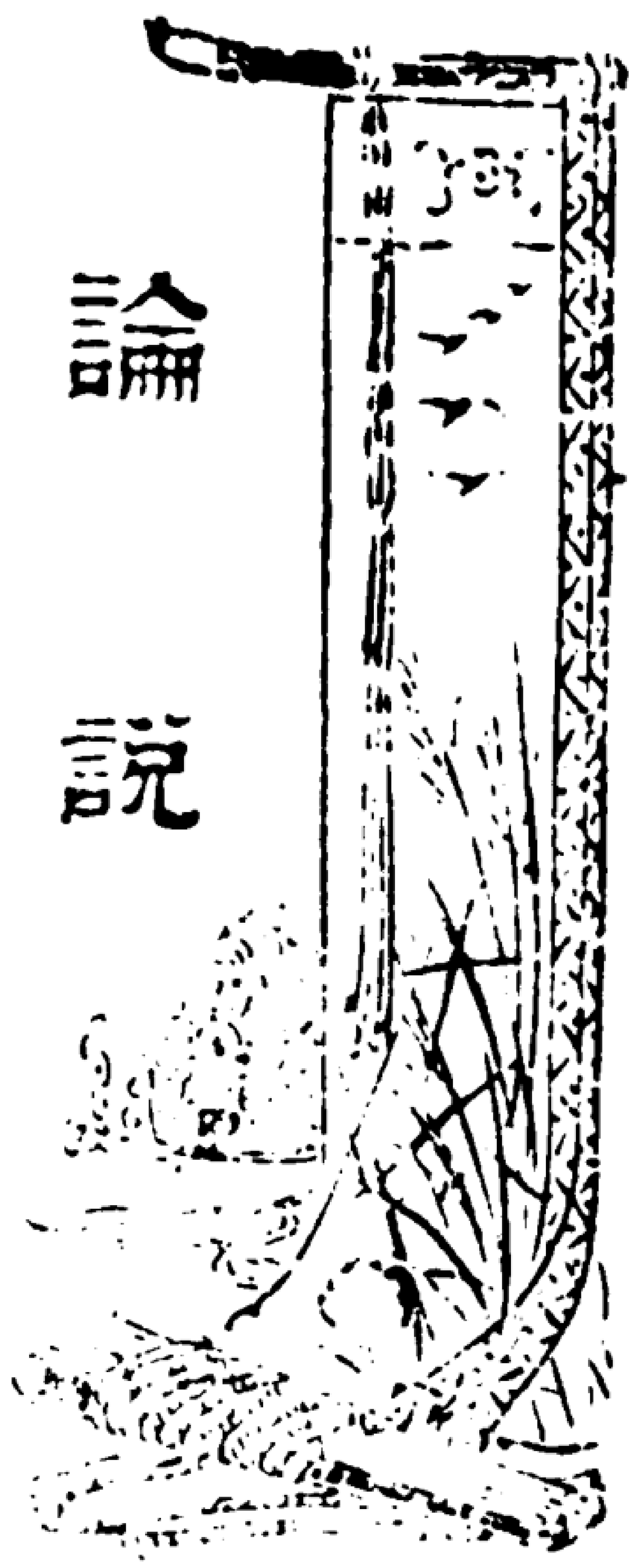
禮は人道の大準にして、喪祭の禮は、その最重きものなれば、庶人にありても、哀痛の情を盡くし、誠敬の意を極めざるはなし。況や、皇室の御大喪に於いてをや。我が

兩陛下の御哀悼は、申すも畏けれども、吾人臣民は、皆赤子たる道を盡くして、聖旨を奉體し、たとひ、皇室に於かせられて、親疎の別を立てさせ給ふとも、宜しく、其の言行擧止を愼み、哀痛の情、誠敬の意を厚うし、一年の心喪を服せざ

るべからず。これ吾人が　皇室に奉ずる至情に於いて已むべからざるものたり。たゞ一年のみならず、此の生のあらんかぎりは、歲時に御追慕あらせ給ふ兩陛下の大御心を体し奉りて、誠敬を盡くし、臣民の分義を全うするは、誠に當然の務なりといふべし。さきに、文部省は、諸學校に訓令して、五日間休校して弔意を表せしめられたり。これ實に當然の事といふべし。然るに、生徒の間にありて、或は、之を以て哀悼の事を終るものと爲すものなきにあらず。又、尋常の休業と同意のものと爲すものなきにあらず。これ實に大なる誤にして、而かも不敬の甚しきものたらざるを得ざるなり。臣民喪服の事を顧み、　宮中御喪の　聖旨を仰ぎ奉らば、いかでか、その心に懼るゝ所なきを得んや。

吾人常に道義を説き、而して、實踐の方に於いて最心を苦しめ、當世浮薄の俗をして厚きに歸せしめんと期すること久し。而して今日この大變に遭遇し、この大禮を行ふ上は、我が大八洲の中に生とし生けるものをして、其の服飾を素まし、其の飲食を菲うし、敢て、一の不敬なるものなからしめんことを望み、殊に、學

事に從事し、學校の教育を受けつゝある所の子女をして、喪祭は人倫道德の最大至重なるものなることを知悉せしめ、以て大に心をとりの義を盡くすことに留めしめんことを庶幾して已むこと能はず、特にこゝにこのことを述ぶるなり。



論説

臺灣の女子（つゞき）

大谷聽濤

臺灣の女子は、毫も其の子を教育するに意をとゞめず。時としては、木片或は箒をもて、其の子女を撲ち、甚しきは之を屋外にまでも追廻るなど、見るに堪へざる、荒々しき振舞を為すことあり。自己にも解し得ざれど、聖賢の言行を説き聞かせ、若くは讀書算術等を、教ゆるなどのことなきは、寧ろ當然と云ふべきなり。斯かる家庭の裡に育ちながら、姉妹の仲睦しく見ゆるは、却て不思儀とこそ云ふべけれ。

臺灣の女子は、其の子女を抱き、或は背負ふこと、內地人の如く多からず。多くは土

間の上に匍匐せしめ居れり。是れ彼等が足の小さくして、自由に其の子女を扱ふ能はざるにも由るべく、又家屋の構造にも因由すべけれど、概して養育上の知識は、甚だ缺乏し居れり。故に孩兒の食物を擇ぶことも亦た精ならず、況んや其の子女の身体の強弱、天候の乾濕等に留意して、養育法を別つが如きことはわらざるなり。

臺灣の女子は、教育法及養育法に就ては、此の如く不完全なれど、日沒後、榻を屋外夕顔棚の下などに移し、闔家團欒して、徐ろに涼風に對し、相談し、相笑ひ、相興じつゝ、終日の苦熱を洗ひ去る有様は、王侯の樂も若かざるべく、藹々たる其の和氣、洋く洋たる其の瑞氣、眞正なる團欒の樂は、此の中にあるを思はしむるものあり。若し夫れ、此の間に於て、終日見聞したる所を相語り、其の智識を交換する利益あるに至ては、之を内地人の家庭に用ゆるも不可なりとせず。

臺灣の女子は、内地の女子の如く、店頭に坐して、商事に從事することを爲さず、又野に出で、耕すことを爲さず。其の多く職業とする所は、只家に在りて、炊事を爲すこと、洗濯を爲すこと、自己の靴を製することのみなり、其の他の職業としては、豚を飼養すること、製茶に從事することゝあり。製茶場には十三四歳より四十歳前後迄の婦女子が、五六十人、若くは、七八十人も、列を爲して働き居れるは、甚だ盛

んに見ゆれど、こは一部の女子にして、一般婦女子の職業には非ず。
臺灣の女子は、阿片を喫するものあれども、內地人の如く、煙草を喫するものなし。每日飲用するにも非れど、酒を好むもの、多きは、蠻習に近し。手の環は大抵之を箝め居れど、耳環を掛くるものは至て少し。嘉義以南に至れど、暑氣甚しき故に、口中の熱を去ると稱し、檳榔子に薄荷を交へたるものを嚙むを以て、歯は悉く澁色を爲し居れり。
臺灣の女子に於ける特殊の風習として、吾人の最も驚くは、葬祭に於ける泣女と稱するものなり。泣女とは葬儀を營む時。棺の後に隨ひ、聲を舉げて慟哭しつゝ、歩むものにして、泣女の數の多き程喪家の名譽なれど、葬儀を行ふに際しては、親戚は云ふも更なり、近隣より之を雇ひ來りて泣かしむるを常とす。又死後幾日間は、親戚近隣の婦女打集ひ、佛前に聲を揚て涕泣する事、恰かも內地人の念佛を唱ふると異ならず。是れ聖人の所謂喪には其の哀を致すといふ心より、生じたる風習なるべけれど、哀心之を悲むにあらずして、徒らに聲を大にして泣く眞似を爲すが如きは、虛禮も亦た甚しと云ふべきなり。若し夫れ病者ある時、醫を迎ふることを爲さずして、加持祈禱を爲す等、妄信の深き事は、內地に於ける僻陬の地と異ることとなし。

（完）

女子教育一斑（三十三）

三輪田眞佐子

されど、寒鳥古木に鳴き、夜猿空山に啼く光景のみは、宇宙の常道にあらじ。春秋の花紅葉、こをあやどりてこそ、雅致あり、快樂ある世なれや。今女子の智識を論ずるにつきても、實用のみにて足れりとなすべからず。別に美優の智識を授けでやはあるべき。故におのれは、後章に於て、美育の大要をものせまほしうなん。

さて、これまで述つるやうの智識を養成する方法は如何にすべき。本來、人の智識を養成する道種々あり。曰く、家庭にて教練すべく。曰く、學校にて教訓すべく、曰く、社會の風潮も影響すべく、曰く、身邊の境遇も感化すべく。曰く、自ら鑑み、はた導くこともあるべし。今これらの類別に從ひて論はんは、かゝる紙上に餘白なきを以て、精しきことは他日に讓り、唯智識の素因となるものむかりを左にものせん。

第一　天性を修養すべし。凡そ人の生るゝや、教へず學ばずして、寒を防ぎ餓を避くるなど、身命を守護する天性あり。これを本能力となんいふ。さて亦教育は、根本より人心を改造するものにはあらずして、たゞ天眞を培養するに過ぎざるべけれど、女子を教育するにつきても、女子の天性を知りて、おのづからなる美質を發輝せしむべし。

さるに、神ならぬ人力を以て、人類の天性を、思ふまゝに變化し得んものと考ふるものは、男子の懐く理想を、女子にも、と責め。男子にのみ適ふ職分を、女子にさへ、と望むらんか。女子を教育するに、讀書だにすゝめんには、よし數學理學、あるは手藝などを授けんには足れりと思ひて、毫も女子の天性を考へざるものさへありとかや、あないまはし。

第二　智識は多く經驗より來るべし。　女子は、本性愚なるにあらざれど、つねに、女子と小人とは養ひ難しなど排斥せらるゝ所以のものは、蓋し智識淺薄にして、是非の心に乏しく、自ら定見なきによらんか。そもく智識の源は、氷に觸れて冷を知り、火に接して熱を知る如く、なべて經驗より來るものを。女子は物を見ること少く、聞くも亦多からさるのみかは、幼少のころより、大概のわざは、他人の手を假りて果すなれど、經驗の機會なく、おのづから慮近かるべし。

かゝる欠點を補ふは、女子を木偶視せずして、苟も女子の本領に屬することは、悉く女子自ら果すべしと悟るに至りてこそよけれ。わきて、女子に必要なる智識の主なるものは、母として、妻として、家政を主るにあれど、幼少のころより、家庭に於て、なるべく經驗をつましむべし。然るに、家庭教育を重んぜざる父母は、娘をも、さなが

ら客人のごとく、無爲に歳月を過さしむるを以て、一朝他家に嫁するとき狼狽するに至らん。世の信に娘を愛するものは、經驗と智識の關係を考へてよ。

第三　習慣。　こは人生に影響することえるきものなり。思ふに、習慣は、その理由だに知らざることすら、つねに行ひて、利を被るあり、將た害を受くるあり。故によき習慣の人は、心賢ならざるも、行賢なることあり。たとへど、清潔を好む人は、衛生の智識なくして能く身体を保全し、規律に慣るゝ人は、心機敏ならざるも行迅速なるがごとし。

こを以て、女子には、つねぐ\よき習慣を養ふべし。されど、この習慣、いつも智識の如く効を奏するならん。由て、女子を善良に敎育せんとならど、その起居動止、あるは言葉、若しくは交際など、總て善良なるに染ましむべし。習慣は、原理を實地に行ふ智識にひとしかるべし。

第四　敎授。　敎授とは、いまだ知らざることを敎へ授くる意なり。されど、之を受くるものは、多くの年月と辛苦とによりて得たる、經驗上の事物を、先覺者より直に學ぶものにしあれど、頗る便利なるのみならず、多量の智識を容易に增し得るものなり。まことや、學校敎育の主なることは、この敎授の方法に由りて智識を與ふるも

のにして、經驗の及ばざるを助け、家庭敎育の欠點を補ふものぞかし。惜かな、敎授の弊は、規則にのみ偏して、活用に迂し。さなくも、智育にのみ傾きて、乾燥無味の才女となりて、なだらかなる識者となる能はざるに至るめり。況して、敎師自ら無識のため、單に文字ばかりを讀むに長じて、實用の才を養ふ感化力なき憂もあらんには、智育の目的を達することも難かるべし。されば、敎師は、達識者を撰びて、活學を敎ふべし。死學を授くべからず。

要するに、右四ツのものは、智識の源泉なれば、悉く兼ね備はるべし。若しその中一二のみを施して、他を顧みざるときは、とても完全なる智育をなすこと難からんかし。見よ天才の女子も、生れながらにして棄つれば、遂に人より秀づる能はず。あるは、家庭敎育をのみ受けし女子は、智識狹くして大器となる能はず。さりとて、學校敎育ばかりに安んずる女子は、實際の生活に迂きが如し。をさ〳〵人事は、數因和合して大成するものなれば、女子敎育も、智識の一源のみを汲みて足れりとな思ひそ。必ず數因相待ちて後にこそ。



史談

理慶尼

大町芳衛

武藏野は草木むかりと思ひしを、かゝる言葉の花もさくらむ。とはめさせたまひけむ、太田道灌の歌、既に亂世の花たり。北條氏康の文、亦戰國の花たることは、人みな之を知れり。干戈旁午、兵馬倥偬の間にも、なほ文學の根は絕えざりけり。和歌文章は徒に殿上人女房の遊戲に歸し、道灌、氏康の如きは寧ろ異數にして、當時の武士はすべて無學、武家の女子は更に甚しきが中に、獨り理慶尼が歌文は、以て、道灌、氏康に配するに足るべし。

理慶尼が歌、未だ至らず。理慶尼の文も未だ至らず。されども、文藝地に墮ちたりし元龜天正の間に於て、此の筆力を見る、太、奇とすべきにあらずや。理慶尼は、甲斐の人なり。武田勝賴の滅亡に逢ひ、一枝の紅筆、千行の淚に和して、其の滅亡の顚末を記せり。理慶尼の記一篇、やがて是なり。

昔者、元遺山、國亡びて、また、異姓に事へず、一代の健筆を揮うて、亡國のために歷史を作れり。人以て其の志を高しとす。理慶尼が滅亡記を作るの概、頗、之に似たるものあり。武田家には勇將猛卒、雲の如く聚りしが、其の亡ぶるに及びては、或は叛き、或は去り、主に殉したるもの僅に數十人、而して、亡後同情の熱涙を寄せて、墳頭に歌を手向け、文を草して、其の事跡を千秋の後に傳へたるものは、理慶尼一人のみ。

古來女子の文學にすぐれたる人少からず、されど多くは、たゞ艶詞を聯らね、綺語を弄するのみ。紫式部、淸少納言と雖、亦之を免れず。歷史記錄の世に徭わるものを作りしものは、太く少く、平安朝にありては、赤染衞門。榮華物語を作りしと傳ふる說あり。以後寂莫として、僅に、德川時代に、荒木田麗子が大鏡の前後をつけし歷史あるに過ぎず。理慶尼の記は、たゞ武田家の滅亡を記するに止まれども、歷史の參考に供すべきは、すでに史家の確信する所、文學の廢れたる亂世に、此の筆と此の志とありしは、亦多とすべきにあらずや。况やその一生よく幽貞を守れるをや。

理慶尼は何人ぞや。彼は武田家の臣下の娘也。勝沼信朝を父とし、雨宮某を夫とせり。信朝は武田家の一族、勝沼に移住してより勝沼殿と稱せられ、晩年髮を薙りて入道と

なり、不山と號しぬ。一朝、叛を圖り、一敗地に塗れて家亡ぶ。理慶尼の父は、質に武田家の叛臣となりぬ。雨宮某、其の連累を恐れて理慶尼を離縁しぬ。憐れむべし、罪も咎もなき清浄無垢の花の身も浮世の嵐には洩れず、わきもわかれもせられぬ夫婦の中をさかれ、一時寡婦となり、孤児ともなり、泣く〳〵、一子を携へて柏尾山なる大善寺に至り、慶紹阿闍梨をたよりて、緑の黒髪そり落し、寺の側に桂樹丼といふさゝやかなる丼を結び、浮世を三衣の中にのがれて、朝夕、心を閼伽井の月にすまし、夫がかたみの一塊肉をなづるむかりを、せめての思出に、幾十年の久しき、松風蘿月の底に獨り幽貞を守りぬ。理慶尼の父の誅せられしは、永祿二年十一月三日なりき。尼の落彩せしは、その後の事なるべし。

甲峽の風雲を叱咤して、四隣に雄視せし武田信玄も、野田城外の笛聲にひかれて、月中の暗丸にあへなくも一命をれとし。その子勝頼、勇は父にもすぐれたれど、謀足らず、老臣前後凋落して孤立自ら安んじ、外は信義を失ひ、内は人望を落し、一朝事急なるに及びては、膝前に叩頭虫を學びし奸臣むら、今は蜘蛛の子と散りゆき、さしもに強盛無双なりし武田家も、その主と生死を共にせしものは、僅に四十余人。雲霞の如き大軍にせめたてられて、國中また一身を容るゝ處なく、刀折れ、矢つきて、田野

といふ山里に一片の露と消えぬ。盛者必衰の世の中に、榮華の夢さめ易きは、怪しむまでもなけれど、さりとは果敢なき武田家の末路、垓下の項羽、粟津の義仲とその歸を同じうして、しかも虞姫、巴姫よりも可憐にしていとはしく、武田家の滅亡に、一種の花の名殘を添へしは、勝頼の夫人なり。嫁して未だ幾ならず、椒閨の香夢、未だあたゝかならずして、新府の城外、秋風已に冷かなり。昨日までは翠帳の下、娥眉ふかくとざしゝ身も、今日は乘りもならはぬ荒馬に跨り、雪の如き纎手に、おぼつかなくも薙刀かいばさみ、國破れて空しく殘る山また山のゆく手、片月雲にかくれて、老梟根を呼ぶ破曉の夜、悲風歸鴉を吹いて夕陽影迷ふ野渡の夕、そよぐ草葉も敵かとおどろかれ、心細くもたどり〳〵て、柏尾山の大善寺に着きぬ。大善寺は、これ理慶尼が幽貞を守れる所なり。今は年老いて、當年の花の俤はなけれど、さすがに棄てがたき浮世の恩義、不幸は我が身ばかりと思ひしに、榮えに榮えし我が主家も、また零落の淵に臨めり。我が父の不忠は今更、悔ゆれども甲斐なし。我が夫や、如何になりけむ。さるにても、いたはしきは勝頼夫妻、月洩る板屋の床を、昨日の玉殿に換へ、わびしき一夜、夢も結ばで明かしゝを、目のあたり見し理慶尼の心の中や如何なりけむ。やがて、此處をたち去り、敗餘の卒をつれて、天目山に趣かんとしたれど、土寇路を

遁りて行くことを得ず、遂に田野といふ山里に、攻めよせられて、今は籠の鳥となりぬ。勝頼は死を決し、夫人だけは生かして返さんと、言葉をつくしてさとしたれど、固く辭みて從はず、死なむ共にと、自、刄に伏しぬ。理慶尼、その狀を記して曰く、

其後、御臺所、御最期も近づきぬれど、御心細くおぼしめしけむ、故郷相模へ、かくならせたまふ言の葉を、如何なる雁のたよりにもことづてむやと、おぼしめして、かくぞ咏じ給ひける。

かへる雁たのむぞかくの言の葉をもちて相模のたふに落せよ

また、如何にもならせ給はんのち御兄弟のなげかせたまはんことをおぼして、

ねにたてゝさぞな惜しまむ散る花の色をつらぬる枝のうぐひす

とありければ、御前なりし女房たち、御最期の御とも申さんとて、かくこそ侍りけれ。

さくときは數にも入らぬ花なれど散るにはもれぬ春のくれ哉

かくて、敵間近く來りたるよし申しければ、法華經五の卷、たてまつれと、めされて、御心しづかに、あそばしたまふ。すでに、御きやうも過ぎければ、勝頼、土屋をめされ、御臺所の御最期の御かいしやくとおはせければ、うけたまはると申して、

御前には出でけれども、はじめて見奉るに、御年の頃、二十歳の内とぞ見ゑさせたまひて、いろ〳〵の裝束めされ、容顏美麗の有樣は、揚貴妃、衣通姫、吉祥天女と申すとも、かほど、なまめいたる形はましまさじ。何處へ劒をたてまゐらせんと、おされはて丶居たりしに、御みづから御守刀を拔かせたまひ、御口にふくませたまひて、うつむきに伏し給ふ、勝頼これ迄御覽じて、急ぎたちより、御介錯をたてまつり、靜にいだきつき、去もしは物をものたまはず。土屋兄弟三人、御供の女房達の介錯とり〴〵にいたしける。

夫人の最期は實にかゝりけり。勝頼も自刄しぬ。其の子信勝も自刄しぬ。土屋を始め、忠義の郎黨四十人もまた同じく仆れぬ。かくて、武田家の榮華は全く田野原上夕陽の影に消ゑぬ。命を露と爭ひし荒野の末に悲風むなしく秋又秋、一片の石塔、僅に遺跡をとゞめて、蔓草徒に深く、人跡全く絕ゑて、虫の聲ひとりかこち顏なり。而るに、世の聞をも憚からず、慨然來りて墓前に花を手向け、歌をさへ手向け、香華を絕たざりしは、實に理慶尼一人也。これ多年恩顧をうけし人にあらず、實に父の謀反の爲に、夫に去られて、一生幽貞を守りし薄命の佳人也。

理慶尼自ら記して曰く、

かくは思ひたてまつれども、國のうち、皆敵なれど、その目をかねて、御墓たつる人も無かりしに、茲に一夜の御宿を參らせしもの、人目を忍び、御墓へゆきて、あまりに御いたはしく思ひまゐらせ、めうかう歌をよみてたてまつる。

なほ竹の林の花のみな散れむ世はうぐひすの音をだなきぬる

むらさきの雲につきかげ入りしより心はやみのよにぞ迷へる

あはれなりあり明ならで浮雲のかゝれむともにいざよひの月

みなそこのこゝろは清き若竹の世ににごりある事ぞかなしき

たれゆきてとはぬ御墓の秋風にうらみやふかき田野のくず原

ふりぬともわきてやとはん跡たえし田野の山邊の苔のした路

理慶尼自ら、志をのべて曰く

あづま都へ、かくれなくして、申すやう、唐土の虎は毛を惜み、日本の弓取は名を惜むと、申す譬の候が、此の武田殿は御めいかはらせ給ひて、天下に御名をひろめ、後代にあげさせたまふ物かなと、申さぬ人ぞなかりける。又このよのあらましとりあつめし物は、柏尾にて一夜御やど、まゐらせしものなり。世をくわんじみるに、人間五十年流てんの內を、たとふれむ、でんくわう朝露、いしの火、ゆめまぼろしの

ごとくあるに、世のいとなみに、うちまよひ、すゑのやみぢをいかゞせん。まことの道に、いらばやと思ひ、その頃たつとき人、慶紹と申せしものゝ、御弟子となり、もとひきり、すみぞめの衣に、身をなして、むろのとぼその明くれに、ねんぶつ申し、經をよみ、心意をすまして、そのあかつきを、まつところに、たけだの御一門、おち人とならせたまひてきたり、一夜の御宿と、おばせければ、たてまつりしに、其のまゝ世にいでさせたまはず、つひに、はかなく、ならせたまへど、御いたはしき事、かぎりなし。いとせめて、御名ばかりをも、とゞめまゐらせ、草葉の露のきゑぬまのわすれがたみにも、みたてまつらばやと、思ひて、かくしるしおき、まゐらせけるとかや。さきのめらがら歌よみてたてまつりしものゝ、尼たり。

叛臣の娘ながらも、其の主家につくすの道、つくせりと云ふべし。人生を悲觀して、佛門に歸し、以て其の節を守る、尼亦一代の貞女たるに足れり。璘慶尼の記一部、血わり、涙わり。實地見聞せし所を記したれど、筆にわやわれども、浮華の弊に陷らず。世の歴史家、取りて資料とせり。その歌、その文なは拙なれども、戰國時代の武家の女の作としては、頗る才藻を見る。嗚呼、美麗の夫人の殉、已に多とするに足る。况、可憐の才女の、其の墓をはらひ、其の事を記するものあるをや。これ項羽にもなく、義仲

にもなし。亦憾むる所なかるべきなり。

尼は慶長十六年八月十七日、世を去りぬ。尼が薄命の間に。勝ち得たるものは、其の壽なり。その生みし子より出で、柏尾山下に家を立てしもの、久保田、水上、佐藤、飯室諸氏なりきと云ふ。理慶尼の記、一は之を高野山に納め、一は之を大善寺に納めしが、大善寺に納めしものは散佚し、たま〳〵源右衛門といふ家に於て、稿本を見出し、それより廣く世に行はるゝに至りしこと、善庵子が序に詳なれど茲に之を贅せず。理慶尼の記、史料に供するに足ることは、前にもいひし如くなるが、その記中のうたは、みな千篇一律、尼が假りに作りしものなるべし。

孝女いまが事

高角山人

貞享、元錄の頃、大和の國竹内村に、いまといへる賤の女ありけり。何人の娘にやあらん、今考ふるによしなし。としごろにいたりけれど、さる家に嫁しけるに、不幸にして、早く夫はみまかりぬ。されど、其の後は、舅に事へてまめ〳〵しく、つゆさからふ事もなく、專ら家業をつとめはげみ、舅のよろこぶ色を見て、こよなき樂みとはしけり。さるほどに、かりそめの事より舅いたづきの床に臥しけれど、いま女の懇き

は一方ならず、日夜怠ることなく、ひたすら療養にのみ心を盡しけれど、さらに其の驗もなく、しよくじをせざることはや十日あまりになりぬ。されど、いま女の心配はいやまさりて、進め參らす好きものもがなと、案じ煩ひけるほどに、ふと、鱣のをと、望みけれど、いま女いたく喜びて、直ちにすゝめまゐらせんとしけるが、海邊遠き片山里に、いかで容易く求め得べくもあらず、とかう思案にかきくれけるが、はや日も暮れはてゝ夜に入りにけり。かくてありけるほどに、厨のかたに、烈しき物音しけれど、いま女はいたく驚きて、何事にやあらんと、いたり見れど、大なる鱣のあまたわりけるに、いま女喜ぶこと限りなく、直ちに之を舅に進めたり。其の後は、病も日にいゑゆきて、ほどなくもとに復しけりとなん。聞き傳へけるものども、皆、孝の德とぞほめはやしけり。當時俳句にて其の名高き芭蕉翁松尾桃青このことを聞きて、自ら行きていま女に見ゑけるが、そが孝養の心深きに、涙を流して感じあへりとぞ。まことや、眞心をこめたる行には、神も靈現を下し給ふにや、あな貴しともかしこきは實に孝の道にこそ。

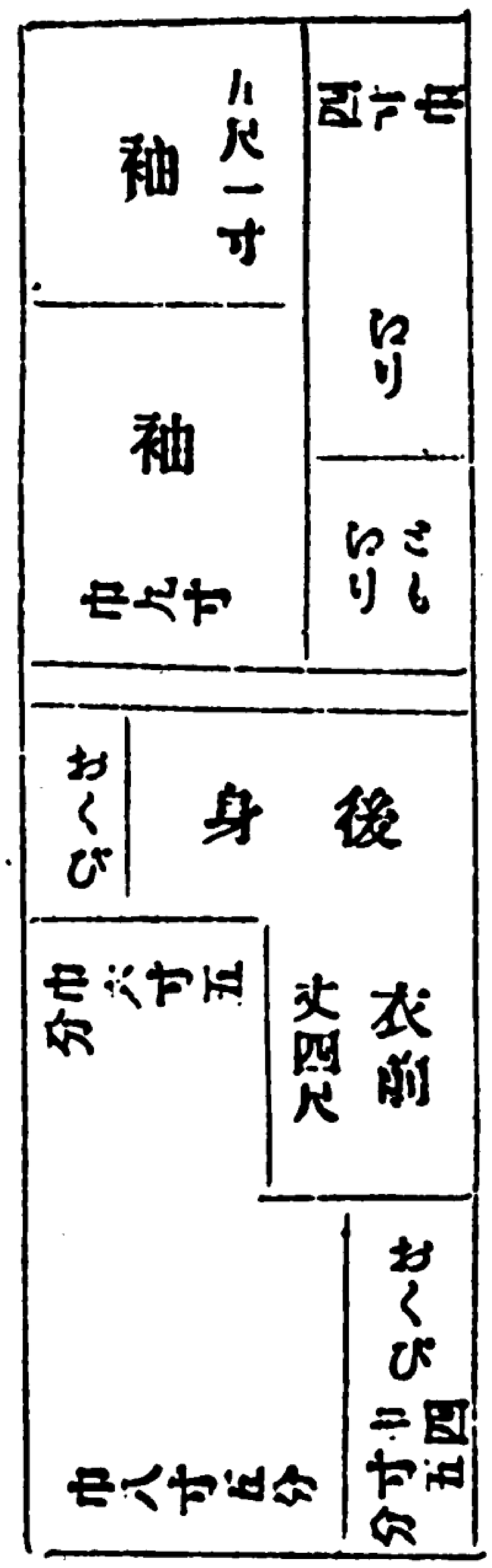


たちぬひ

西山たい子

（六十二）縮緬尺三寸巾中振袖の裁ち方

その圖



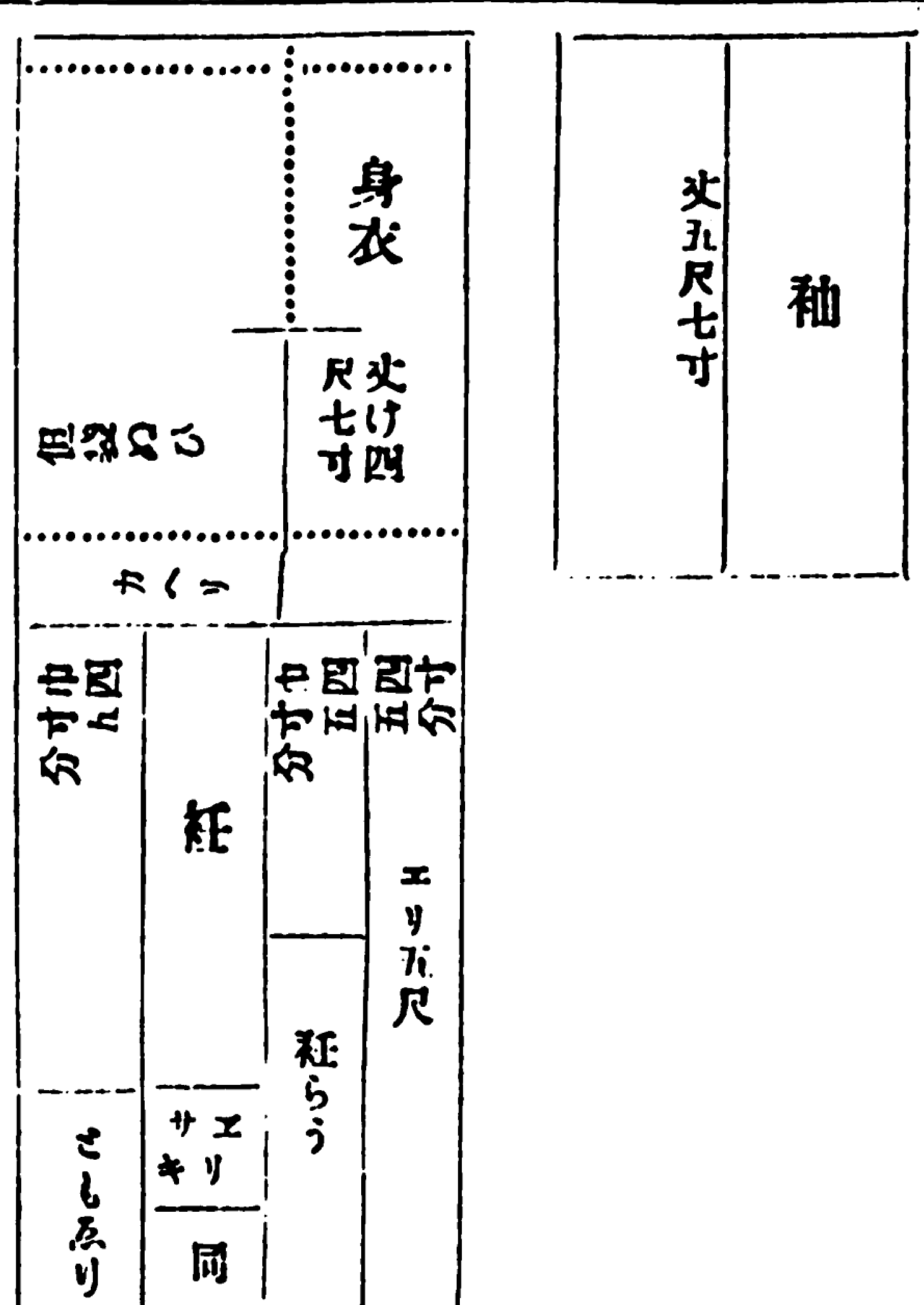
總計二丈二尺二寸

まづ圖の如く兩袖ぶり一丈二寸をとり、そのわきより襟を巾四寸だけかきとり、後に眞二つに切りて兩袖とすべし。殘りを三つ身の如く三つに折りて、三つ身の如くに兩方より眞中まで切りちがひにたちその切りちがひし處より中の切れを縦に眞直に切るべし、その切りたる處、前となるなり。後身の脇より兩方とも衽をとるべし、よく圖を見合すべし、寸尺等も圖にあり

（六十三）同大巾振袖の裁ち方

まづ袖丈だけを切りて、縦に眞二つに切りて兩袖となし。殘りより身衣の丈をとりて、一つ身の如くたちて、背を袋ぬひとなすもよし、また最初より縦に眞直に切りはなすもよし、さて、身衣の殘りをたてに二つに切り、衽のたけだけに切り、またたてに眞二つに切りて兩衽とし、先きより出でし切れをまた縦に二つに切りて、とも襟、及びゑりさきになすべし、また先きの半巾たちたるものをも、縦に眞二つにきりて、一片を襟とし、一片を横に眞二つにきりて、衽うらとすべし。但し之を裏へのかへり五寸と見たるものなり。丈け等はそめ出し等にて、よきやうに見はからひ、心のまゝにたつべし、寸尺等圖にあり、よく見合せ、心を用れてたつべし。

その圖



總計二丈〇一寸

だいどころ

洋食を喫する心得（續き）

「スナウ」杯の汁ある類の料理を食せんとするときは

麵包に浸し、受けて食すべし。

「ヲムレツ」杯の如き柔かき料理は「ナイフ」にて切らず「フオーク」にてちぎりて食すべし。

食事中は、口の中、又は咽喉にて音をさすべからず。

又た食物を口一杯に含むべからず。

「ナイフ」にて汁をすゝり、又は「ナイフ」を舐むべからず。過ちて指抔を汚したるときは、手巾にて拭ふべし。口にてなめ、又食卓布にてふくべからず。

かみきりたる食物は、再び之を皿の中に入るべからず、食事中恣にたちゐし、又は「ナイフ」「フオーク」杯をふりまはし、手まね抔して談話すべからず。

對食する人の足に、己の足の觸ざる樣注意し、みだりに足をのばすべからず。

食事中に、咳又は噴嚏などなすべからず。己むを得ざれど、默禮して外に避けてのちなすべし。若し其暇なければ、手にて口を掩ふべし。

椅子によりかゝり、食卓にもたれかゝるは、禮にあらず。

主人より己に進められたる食物を、隣席の人に讓るは、隣席の人に禮を爲すに似たれども、主人に對し失禮なれど、之を爲すべからず。總て主人より進められたるものを辭退し、又は他人に讓るは禮に非ずと知べし。

食物の中より、蟲又は毛髮杯の出でたるときは、窃に之を皿の緣に置くべし。これをあはたゞしくするは、主人に對し禮を失す。

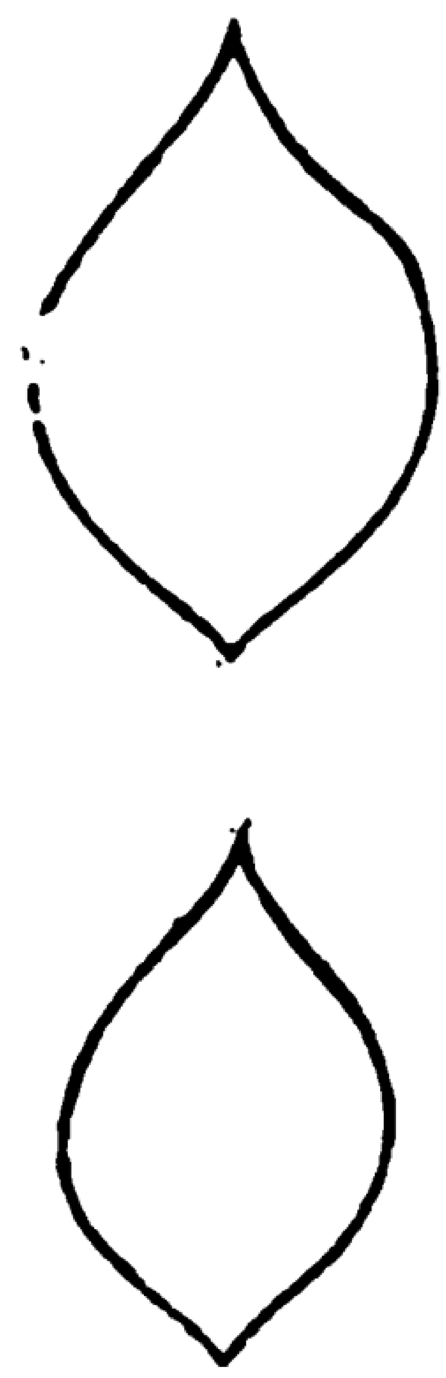
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

水仙

滿開の造り方、花瓣は、羽二重又は寒冷紗を「オウラミ」にて極めて淡く下染し、第五十四圖の如き形に、實物を見合せて大小各三枚つゝを造り、元の處は「グリン」にて淡青くぼかすべし。かくして後、其の中央を表より鏝にて引き、裏返して左右を瓣鏝の小にて引くべし。

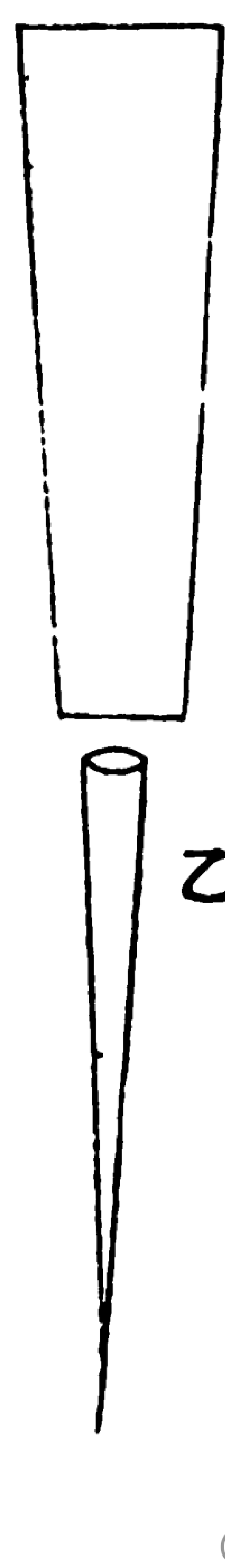
第五十四圖



蕚は、青紙を、第五十五圖の甲の如き形に斷ち、半

第五十五圖

甲



乙

ばより下部を、「セルリン」と「レモンエルロー」とにて模糊し、櫻の蕚と殆んど全し樣に固く巻きて乙の如くすべし。

この蕚によき、配りに小の花瓣三枚を付け、其の間々に大の花瓣三枚を付け、後に蘂を付くべし。

蘂は寒冷紗を「ヨーシン」にて淡赤く下染し、其上を「オウラミ」にて濃く染めて第五十六圖の甲の如き形に斷ち、之を二枚重ねて少しく濕し、圓き火箸の頭の如きものを少しく熱し、之にて乙の如き形となすべし。又別に、寒牡丹の蘂に用ひしものと全し樣にし

第五十六圖



たる糸六七本を束ねて、其の先に糊をつけて、黄色に染めたるこまかき酒中花を付け、之を針金の先にくゝり付けて、丙の如くなし、前に造りし乙の中央に穴を明けて、之をさし込むべし。又直ちに乙の中に黄色の酒中花を付くるもよし。

半開の造り方　は小の花瓣のみ六枚にて、滿開より少しく薄青く染め、實物と見合せて宜しき樣に造るべし。

蕾の造り方　蕾は、薔薇の蕾と全し樣にして極く小く造るなり。色は「オウラミ」と「グリン」とにて薄青く染むべし。

この滿開、半開、蕾、なぞを一莖に纏め、莖には針金を眞として青紙を卷くべし。

第五十七圖



葉の造り方　葉は、伽羅子を、前號に示したる竹の葉と仝し色にそめ、之を實物に合せて形をとり、二枚を重ねて一枚に用ひ、先の方は瓣鏝にて少しくろり返らしめ、尚葉の粉をふきたるが如き處は、顔れしろいを筆の先につけて少しく散布すべし。

以上の如く造りしものは、實物を見合せて適宜の恰好に纏むべし。根には、美濃紙の上端を少しく「カシトラバル」にて模糊したるものを卷くべし。第五十七圖參照



日本文典（二十五）

鹽井正男

被役動助動詞の「しめらる」といふ詞は、やがて、役動助動詞なる「しむ」の將然の格「しめ」の下に、能動助動詞なる「らる」の添はりて出來たる合併助動詞ともいふやうなるものにて、斯くて、他よりしかせしめられて而してしか爲す意をあらはす助動詞と成るなり。

その活用するさまは、先に能動助動詞の所にわげた

る「らる」と、全く同じさまにて、

將然　終止　連用　連体　已然

しめられ　しめらる　しめられ　しめらるゝ　しめらるれ

といふやうに活用して、四段活用、二段活用、一段活用左行變格、良行變格などの動詞の下に連ねて、此の意をあらはすを得、而して、其の動詞に連續するには、必ず其の動詞の將然の格の下に連ぬべきなり。例へば、

女子の手業を學ばしめらる

君に代りて征討軍を率ゐしめらる

好まぬ草木を強て庭に植ゑしめらる

幼きより深く學問せしめらる

家にのみ居らしめらる

これは、唯終止の格の時のみの例なれど、其の他の格の時も、これにて自ら判らんと思へば、はぶくなり。

次には「せらる」といふ被役動助動詞は、仝じく「す」といふ役動助動詞の將然の格「せ」に　能動助動詞の「らる」の添はりて出來たるものにて、その活用するさまは、また「しめらる」と仝じく、能動の「らる」と仝樣なるさまなり。

將然　終止　連用　連体　已然

せられ　せらる　せられ　せらるゝ　せらるれ

これは、四段活用の動詞の下に連なりて、被服の意をあらはす詞にて、その他には、良行奈行二變格の動詞の下に連りて、その被役の意をあらはすのみなり。例へば、

書といふ書を讀ませらる

強て去なせらる

いつまでかゝる所に居らせらるべき

動詞につゞくには、動詞の將然の格の下につゞくなり。

次には「さする」といふ被役動助動詞は、全じく「さす」といふ役動助動詞の將然の格に「らる」といふ能動助動詞の連りて、出來たるものにて、その活用するさまは、やはり、能動詞「らる」の活用と全様なり。

將然	終止	連用	連体	已然
させられ	させらる	させられ	させらるゝ	させらるれ

これは、二段活用、一段活用の動詞及び加行左行二變格の動詞に連りて、被役の意をあらはすを得。さて連續するには、やはり、動詞の將然の格の下に續くなり。

起させらる　　受けさせらる

着させらる　　來させらる

學問せさせらる

十　過去助動詞

これは、動詞を助けて、その事物動作の既に過ぎ去りたる意をあらはす詞にて、この助動詞の類には、「つ」「ぬ」「たり」「けり」「き」などいふ詞あり。

「つ」この助動詞は、今正に終りたる過去の動作をあらはす詞にて、過去をあらはす助動詞の中にては、「たり」といふのと共に、現在に近きものにて全現在をもあらはすことなり。此の助動詞の活用するさまは、

將然	終止	連用	連体	已然
て	つ	て	つる	つれ

例は、さきに動詞の時の事云へる條りにも擧げたれど、なは一つ二つ擧ぐれど、

うたゝねに戀ひしき人を見てしより
夢てふものはたのみそめてき。

ふく風の色の千種に見えつるは
秋の木の葉のちれどなりけり。
をりつれど袖こそにほへ梅の花
ありとやこゝに鶯のなく
花見にと出でにしものを秋の野の
霧に迷ひて今日は暮らしつ。
何處まで送りはしつと人間はゞ
わかぬ別れのなみだ川まで

「ぬ」、この助動詞は、奈行變格の動詞なる「去ぬ」より來れるものにて、大かた「つ」と全樣なれど、たゞ「つ」よりも一層現在に近くして、されどまた未來の意をもあらはすやうになることあるは、前に動詞の時に云へる係りに云ひたる如し。その活用するさまは、

將然	終止	連用	連体	已然
な	ぬ	に	ぬる	ぬれ

と活用す。これも例は前にもありたれど、なほ一つ二つあぐれば、

くらべてし振分髪も肩過ぎぬ。
君ならずして誰かあぐべき
秋きぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞおどろかれぬる。
大かたの秋くるからに我が身こそ
かなしきものと思ひしりぬれ。
君こむといひし夜毎に過ぎぬれど
たのまぬものゝ戀ひつゝぞ居る
戀ひせじと御手洗川にせしみそぎ
神はうけずも成りにけるかな。

なほ「つ」と「ぬ」との區別は、第十三、第十四號にありたるを見合はせられよ。

「たり」。これは、前にあげたる過去助動詞の「つ」の連用の格なる「て」に、「あり」といふ動詞の合して、約まりて出來たるものにて、即ち、「てあり」が「たり」となれるなり。其のあらはす過去の度も、其の用ひざまも、「つ」と全じくて、現在に近き過去にして、されど全現在の意をもあらはすを得。

その活用するさまは、

將然	終止	連用	連体	已然
たら	たり	たり	たる	たれ

と活用す。動詞につゞくるには、動詞の連用の格の下につゞくるなり。

山河に風のかけたるしがらみは
　流れもあへぬ紅葉なりけり。。

思はずに時雨の雨はふりたれど。。
　あま雲はれて月夜きよしも

陸奥の國にいきたりけるに、あやしく面白き所々多かりけり。

雪に降りこめられたりといふを題にて歌よみけり。

新古今和歌集講義（五）

塩井正男

題知らず　　讀人知らず

風まぜに雪は降りつゝしかすがに
　霞たなびき春は來にけり

○此の歌は、萬葉集の九の卷に、「風まじり雪は降りつゝしかすがに霞たなびき春さりにけり」とあるを、やゝ詞をかへて轉載したるものなり。それには「風まじり」とあるを、これには「風まぜに」とあらため、また、それには「春さりにけり」とあるを、これには「春は來にけり」とあらためたるなり。其の詞づかひの異れるふしを、よく心と

めて見るべし。か丶る所にて、萬葉の時代と新古今の時代との口つきの變りたるふし〴〵も、かつ〴〵見るを得べきなればなり。○風まぜに「風にまじりて」といふ意にて、「風まぜに雪はふりつ丶」とは風ふき雪ふる風雪のけしきを云へるなり。萬葉集なる「風まじり雪は降りつ丶」とあるも同意にて、萬葉集には、なほ此の外にも、五の卷の山上憶良が貧窮問答の歌に、「風まじり雨ふる夜の、雨まじり雪ふる夜は」などいふことあるが、風雨の夜、雨雪の夜といふことなり。なほ　風まぜに村雨ふりて片岡のならの葉隠れをじか鳴くなり」などいふ歌あり。これ等にて、「風まぜに」の意は、大かたを知るべし。○しかすがに、「しかしながら」といふ意なり。○たなびき、前に云へり「なびく」と變らぬなり。

○一首の意は、空はなほ風にまじりて雪はふる寒き時候ながら、しかしながら、來るべき時節なりとて、寒空ながらも霞なびきて春は來たツイといふ意にて、風雪の寒き空ながら霞みたる早春のけしきを詠ぜるにて、思想は取り立てたる所あるにあらぬも、深き感慨の溢れたる歌にて、餘韻いふばかりなし。

題しらず　　讀人知らず

時は今春に成りぬとみ雪降る
　遠き山べに霞たなびく

○時は今、或本には、時は今はと書きたり。此の句の意味は、その如くにて、今は時がといふ意なり。○み雪ふる「み雪」といふ詞の「み」は、元來賞美の意をあらはせる詞にて「み雪」といへば、もとは、雪をほめて、しか稱へるにて、雪といふこ

とゝ、さしたる意義の別はわらざりしなり。されど、いつしかうつりゆきて「み雪を「深雪」の意にも用ふるやうなれり。こゝは、やがて「深雪」の意にて「み雪ふる」は、こゝにて雪深げなる遠き山べを形容したるなり。

〇一首の意は、今は時が春に成つたりと思ふて、雪ふかげなる遠の山のほとりもうち霞む事よと詠ぜる意にて、霞たなびくの下に「よ」ともいふべき詠嘆の詞わると仝じく、詠嘆の意をこめて見るべし。この歌は早春をよめるにわらずして、早春に遠山の霞をながめてよめる歌なり。

堀河院御時百首歌奉りけるに殘りの
雪の心を讀み侍りける　　權中納言國信

春日野の下えも渡る草のうへに
つれなく見ゆる春のあわ雪

〇はしがきに堀河院とあるは　堀河天皇の御事なり。〇權中納言國信、源の國信の事にて、彼の和歌に堪能なりし源の顯房の子なり。〇春日野大和の國なる名所にて、伊勢物語のはじめに、「昔男初冠りして、奈良の京、春日の里に、しるよしゝて、狩りに往きにけり」とあるも、同じわたりなり。古今集に「春日野は今日はな燒きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」とある春日野も、やがて仝じ野べなり。〇したもえわたる草、萌えゆく草といふ意にて、したは、上に消え殘りてある雪に對へて「下」と云へるなり。而して、此の詞の用ひざまに、極めて例の工あるなり。下もえわたる草といふ詞は、表には、たゞに萌え出る草といふことを云へるなれど、裏には、心に思ひ集るゝと　やうなる有情の意を含めたり。

「心」は無形のものにて、見えぬもの故に、上にあらはれぬ意より、「下」ともいふ。古今集の有名なる歌にも「戀ひしくはしたにを思へ紫のねずりの衣色に出づなゆめ」などある「した」も仝じことにて、「心に思へ」といふなり。また、心に思ひ焦るゝ事を、「もゆ」といふことは、平生にも人の云ふ所にて、古今集の歌に、「夏虫を何かいひけむ心からわれも思ひにもえぬべらなり」などあるにても知るべし。此の如き詞の縁によりて、さるあはれなる心をあやなしたる工を心をとめて見よ。○

つれなく見ゆる、つれなく」は「同情なし」或は「知らず顔」といふやうなる意にて、前の「下もえわたる」といふ詞に對へて、此處に工に起し來れる詞にて、草のもえ出る春のけしきに伴はで、雪の強て殘り居る樣を、しか云へるなり。○「春のあわ雪」、春ふる雪は、冬のとは異りて、さばかりに固く氷り居らざる故に、自ら輕くして泡の如き故に、しか云ふなり。この歌の殘雪は、去年降りたる雪の消え殘り居るにあらで、春に成りての雪をいふなり。

○一首の意は、春日野の草は、春の心を知りて、あのやうに萌え出でゝ、けしきばめるに、雪はなほ殘れるが、誠に心強く同情なげに思はるゝ雪であるワイと詠たるにて、多かる野の中にて、春日野を取り出だし、さて「下もえわたる草」といひて、萌え出づる草の奥に、愛情といふやうなる意を有たせ、而して共に春の心を知るとはせで、つれなげなる雪なりとあやなしたる詞づかひの巧妙なる、誠に新古今集の長所といふべし。

この歌の「つれなく見ゆる」といふ詞の意に就き

ては、なは他に「たとひなき」意をいふなりなどいふ説あれど、おのれは、さては一首の意の面白からざれど、かくは釋きたり。

漫録



國字孝經（四）

あ、ま、

はやう親につかへていみじき人は、常に平らかなるほど、かしこまりいとはしみて、家の内くねぐ〜しき事なく、心をやすめ慰めんは、いはんもおろかなることにて、其のかなしと思ふ人の、病にわづらひなぜせんには、ことにうれへくンじて側去らず、お物よ、薬よ、又あはせをも、菓をも、何かはよけんと走りまどひて、とく〜〜をこたり給はんやうに心の限り、神〜〜にも祈らぬよなく、あるは、さて、あり〜〜て限りある道におくれたらんに、ひたぶるに己が不孝のとがにこそはと、身をせめて歎きかなしみ、さてはての事ども、いつくしうしなすになん。かくばかり孝の心の深かるは、たかき人ならんにも、心をごりなく、いはんや下ざまならんに、たかきをあなづらず、人と打ちいさかふ事なども、ふつにあ

らぬものなり。たとひ上なる人なりとも、をごりほこらはしきふるまひの打ちかさなりなば、心ど、家國をも亡ぼしうしなひつべく、又下りたる人上を輕め、掟に背きなんには、忽に罪にあたりぬべし。はた友だちの中も腹あしく、こと〴〵に物あらがひ、好めるはいたくいみにくまれて、はては、世の中にうちすてられぬるかし。

されど、罪をかしの品、重きも輕きもさま〴〵にわかりぬれど、いひたてば、孝の道に背きぬるよりはじまれるわざにしあれば、くさ〴〵の中に、不孝の罪ばかり大なるはあらず。父母に哀しきめを見せ、先祖のなきかげをさへはづかしむ事、いふにもあまりて、いみじうゆゝしき事ならじや。よりて思ふに、親と主とにたぐへては、師をたふとむべし、敎をないがしろに思へば、萬の道あさましう亂れぬるにこそ。

さて、すべて賤しき民の、上を打ちまなべるに、まづ上に行ひ給ふなる正しき政の筋、耳ぢかう、さとし知らしめ、はた、うるはしきてふりを見せならはせ、ひたすらに孝の道を敎へすゝめんにしくはあらじ。さては、禮節の道になん、禮節のはし知り得たらんには、打ちふるまふ身なり、うるはしうとゝのひわたりて、ほこらはしきけうせぬれば、かしこまるべく從ふべき筋、自らわきまへ知られぬべきなり。まづ、人の親にかしこくあへしらひたらんには、其の子のいかでうれしとは思はざらん。人の主にも、人の兄に打ち向ふにも、しかせんに、それが從者、それが弟などのよろこびなん、やがて同しかるべし。かうあまたの人にうれしと思はするも、此の禮節の道になんある。

されど、あがりての代の、かしこき人の孝の道敎ふるには、此の禮節をもて、我が身を正しうして、さやうに、人の親、人の兄、人の主と、いづれにも〳〵、心を用ひてあへしらひつゝ、聊かも道に違ふ事なければ、其の正しくうるはしきをめでまねびていつとなう孝の道を覺え知りたりしとなん。

人妻六德諺解（續）

不妬（ねたまぬ事）とは、ねたまぬ事なり。惣じてねたむとは、夫のわれを愛せずして、他の人を愛する事をねたむなり。此の心あるゆゑに、夫もわれを愛せぬなり。ねたむことなく、夫のよろこびをわがよろこびとして、前にいへる、柔順、清潔の心ならば、夫もなぞかわれをにくまんや。心やはらかならずしてすさまじく、夫にしたがはず、かへりて夫をしたがへん事をおもひ、心淸からずして、おのれが欲をほしいまゝにせんと思ひ、心いさぎよからずして、うしろぐらく、かくすことありて、夫のよそ心ある事をうらみいかり、つのゝおひ出でねどかりのかはつきし、つぶやき、夫の目をかくるものには、あくまでつらく、はしたなくにくみのゝしらば、夫も、いかでか、うとみはてざらんや。みなわれから、うとまるゝやうに心をもちて、夫のうとむをうらむるは、おろかなり。夫のあいするものには、なほもなさけをかけて、めしつかひ、よろづにやさしきこゝろばへあらば、夫も是をかんじて、なぞかわれにむつましからざらん。われにねたむ心はなけれど、かれがをごりて、われをあなづり、ないがしろにするが、はらだゝしく、う

らめしきと、かならずねたむ女のいふ事なり。夫にうとまれ、すさまじく思はるればこそ、かれもあなどるなれ、夫にむつましく、したしまれ、かれにもなさけふかくば、かれもかたじけなきことにおもひ、たふとみうやまひもせめ、いかで、かろしめあなづらんや。あなづらるゝは、わが心がらなり。又わきばらの子をにくむ事、おろかなることなり。他人の子をやしなひてだに、いつくしむ事なるに、わがたいせつに思ふ夫の子なれば、すなはちわが子なるを、うまぬ子なればとて、にくむは、夫をたいせつにおもはぬほど見えて、あさましきことなり。すべて、ねたむ心より、家をやぶり、子孫をたやす事、世にすくなからず。ねたまぬといふ徳によりて、家もさかえ、子孫長久なる事、又ためしおほし。

儉節（つゝまやかほどよし）とは、人ごとに知るけんやくの事なり。儉とはつゝまやか、節とはほどよき事なり。夫のおごるさへよからぬ事なるに、妻のおごりは、かならず家をやぶること遠からず。よろづにつひえなきやうに心をつけ、ことに我が身のきるゐのもの、くひもの、身のかざり、あそびごと、あさ夕にもちゆる紙、筆のたぐひ、ともしびにいたるまで、用はとゝのひて、すこしもつひえなきやうに心をつくべし。いにしへ今の世にも、妻のはたらきにて、夫をも、しうとめをも、はぐむためしさへあるを夫のものをつひやして、おのれが身の欲をほしいまゝにし、あるひはほどに過ぎて、いんしんふるまひ、ゆさん、もの見、なぐさみ事につひえをいとはぬは、家の内のぬす人なり。はづかしき

事にあらずや。

またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

十一日。此頃相國寺に宿ります誠拙の禪師より、御思ひ如何に在すらん。勸めたまへる追悼の題も、ねいまだよみ出侍らず。さはさて、さき〴〵よりこひ申す老の腰折、未だなほしをへ給はずや、如何にぞ早く見まほし。やみふせるはれ心のいとゞいられ侍りて、などいひ來れり。例のおこたりに黙しあへずまきかへして其奥に書加へたる、

言の葉の深きしげみをわけ〳〵て
思はぬ法の花を見しかな

十二日。今日は殊につれ〴〵と、ながめくらして一人居り。月深うさし入りて、疊の上いと白きに、桂の葉かげあざやかに、袖かけてうつれり。ものゝあはれは夏こそと、むかしより思染むを、

てる月の桂も手には取らるれど
獨戀しき影ぞ見ねこぬ

十三日。

十四日。今日、俄に佛光寺の君入らせ給ふべしとて法橋せいくわんなど、これかれ來集ひてのゝじるめり。御まうけ如何はすべき。まづ川つきなる高どの見はらしよし。其北おもてをれましにしつらひ、新しきゐむしろの長むしろ、なげしのかぎり高欄の下までしきつめたるべし。いとはせめて、涼しき様にとて、青簾かけ渡して、半高くかゝげたる、東山の若葉打匂ひたるもいとなつかしきに、日々にまゐとぶらふあたりも、彼處の隈なるいらかなりや。例のさしぐみて打まもらるゝに、かの他の國のみかど、

きさいの宮のつかを望みて、はる〳〵心をやられけんを、ふとぞ思ひいづ。何がしのさかし人、みぬかはつくりけんさへ、いとにくゝこれもひなりて、

　高どのをこぼつにつけてこぼれけん
　　涙をさへにまたふ今日かな

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて入らせ給ふ。けにやこの春世にゆすり聞えし御得度のあとあざやかに、童形の花のかをりは、いづちやり給ひけん、名殘のみどりいと青く、藍より出でと見奉るに、はたばりひろきれんけさなど所狹きを、をさ〳〵しくかき合せ給へるも、色すなはちと見給へ。驚きて涙さへそゞろくめり。よきかたにもあしきにも、いづれ變りゆくらんは、いみじき世なりや。君には此頃の嘆の上を、打いで給ふまに〳〵、うちうるませ給へるもいとかたじけなし。なきかげも御かげにふして、如何にか聞くらん、

　上もなき君が涙の白玉は
　　よみぢを照らす光なりけり

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸ぎみつれてまたがはせ給へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齢に、今はをとなだち給はれど、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿、うち〳〵今日のついでにとり行はせんとや。御坐の間いと狹きに、ひろぶたやうのもの、人々運びまかなひわづらふめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞく頭うちもまろぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、その岡邊によせおき侍らむ、ひげにおのれら如き愚昧の入道には、よもなしたまはじなど、打笑まひ宣はす。すべてかしこしともかしこう、おはけなきわざなりや。さて正行院の君とうで給へるを、さる御祝の御心に

やと披見れど、觀水院と名づけたる事の由承りれよびぬなどはしがきわらせて、

すみ勝る夜の川瀬の音つれを
　おとづれなりと聞わかすらん

夕かけては、高樓に移りたまひ、御盃あまゝたゝびすゝみて、何くれの御物語かきくづし給ふほど、見わ渡る川原の景色言はん方なし。彼の川音澄渡りて、風いと冷なり。

すむ月のふけゆく儘に高どのゝ
　上まで昇る水の音かな

とうたひ出せり。猶言はまはしき心あるを、汲み給ひてや、語出たまはく、まろもおとつとしの此頃、妻に離れて其悲思ひ知りぬ。親に後れ子を先だつる苦のひみしきは、固よりなから、こは一すぢのせん方なきに中々おもひあきらむる方もあなめり。めのわかれは、只今此ころのかはり得らるべう、忍草を忘草とも摘かふべく、さる方に人もすゝめものすれど、手も觸れつべきものに、世にもて騒ぐなん其殊更に悲しき。又唯人の一人の奴つれたらんが、其人を道中に失ひたる心地してかたはらさしわたれる何くれのあなゝひに、ねろ〳〵厭ふべきなん。其奴は何ならぬに似たるもの、打つけの苦ものに似[illegible]き心地すめりや。さるだい人の上は、身に知らねどおもひよろふるなんわりなきなど宜ふを、うけたまはるに隔てざりけりと思ひしりぬ。此桃成人來りて實や妻に後れし心まどひは、迷子になりし盗の心地なんすると申しゝを、實にもさこそと聞侍りし。かれも我も其子ならねど、迷ひたる心は、打つけに知り侍らぬものから、引よせておもひくらぶるなん、君がればしあて給ひけん、御意にかしこくもかはり

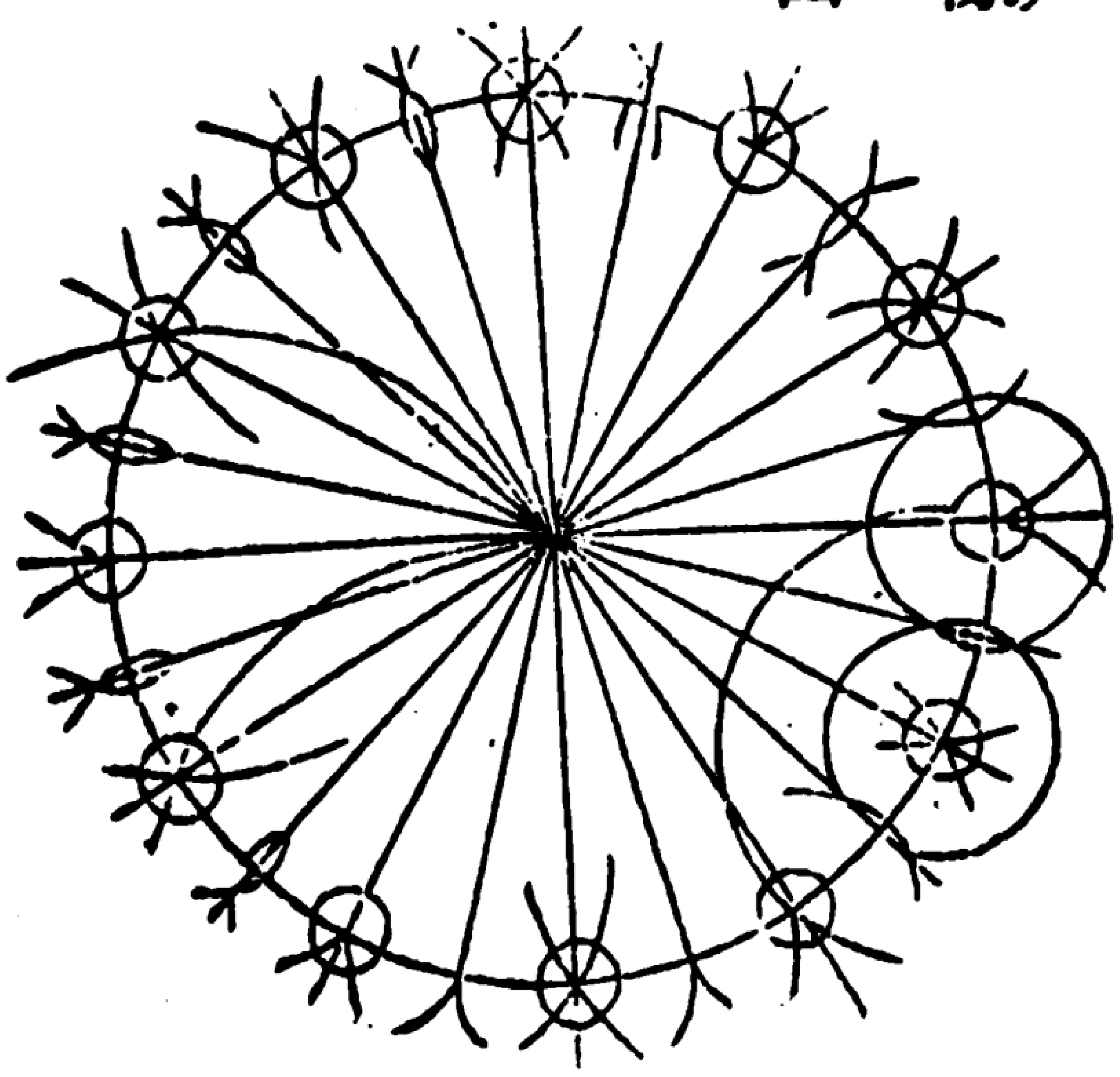
馴らぬなど、何くれ此世のせんすべなきをかたふきかはし、語らひ奉るほど、川づらは皆暗くなりて、見え残りたる山もとに、鳥の聲しむ〳〵聞ゆ。

（未完）

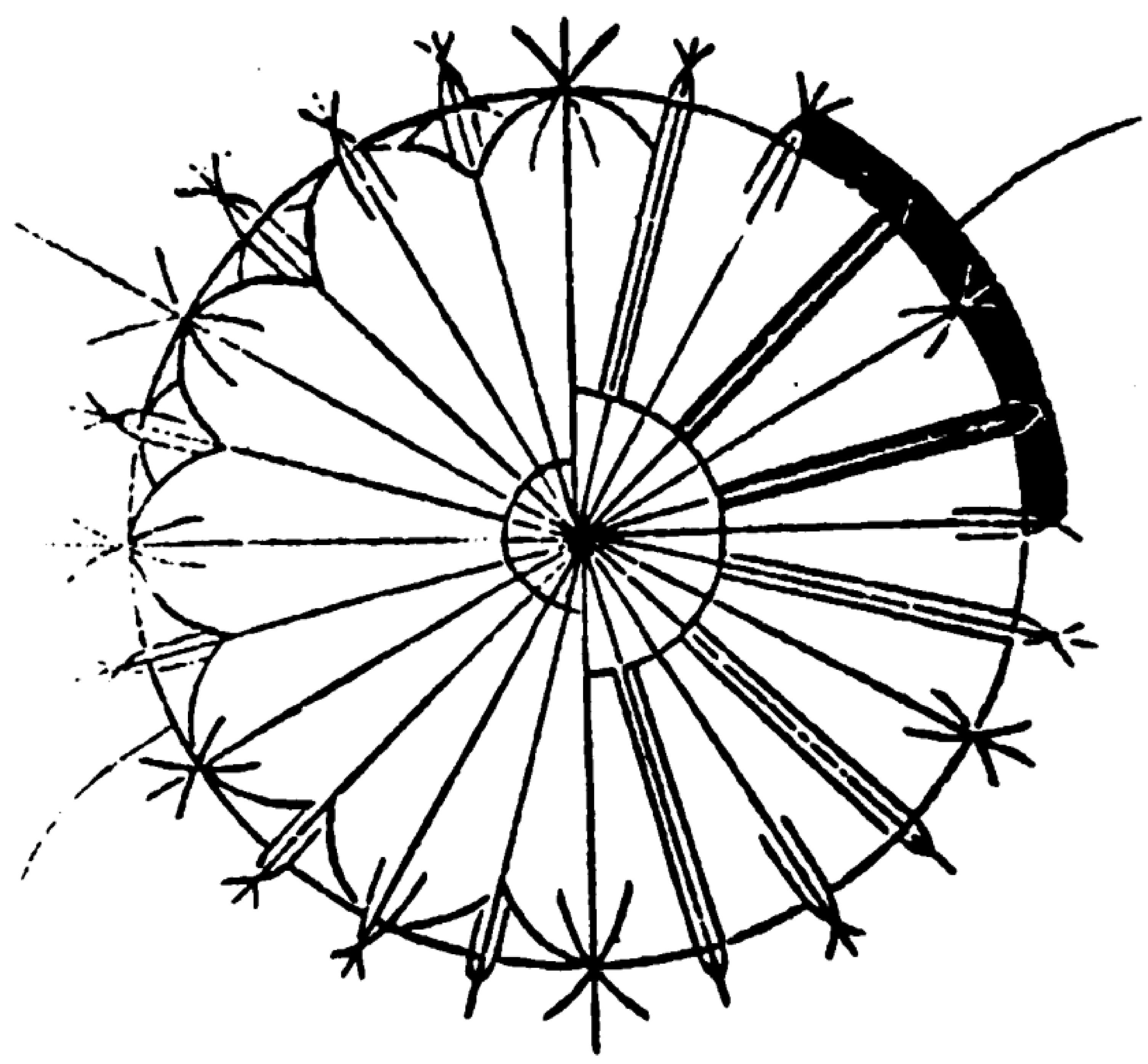
紋帳圖式綱目（續）

井上頼文寄贈

十二の物
但廿四の割



十二の日足

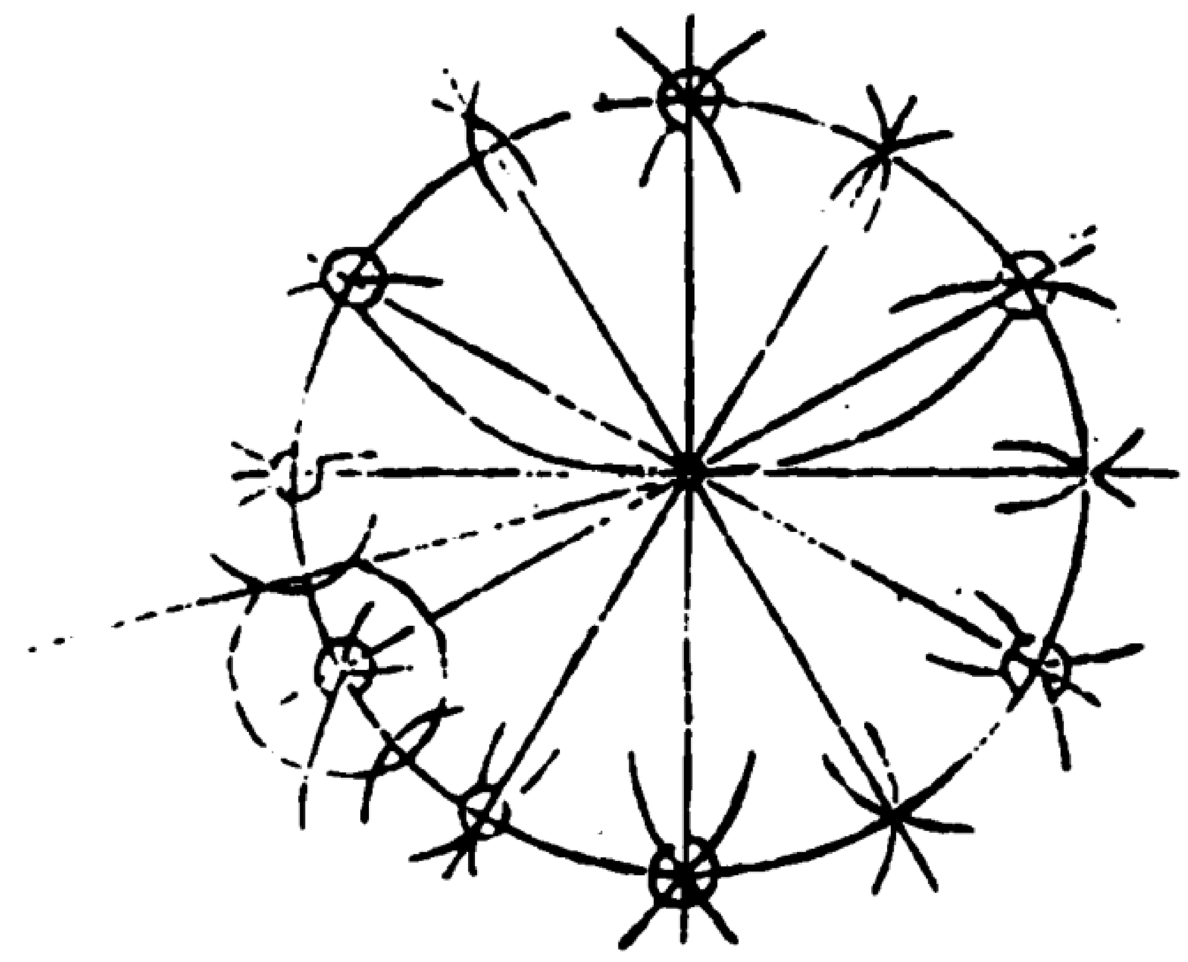


十二の菊の八重

仝一重

右の類は此のわりを用ゆ。割りかたは、まへにしるしたる六つもの（十二の割）のあひだをわるなり。

但割方如此



荒木田麗子のかける大江の賦

一云賦二陸奥羽林一

栗田寛氏寄贈

荒木田麗子は、世に名高き文才のすぐれたる人にて、女ながらも本居宣長などゝ歌文の論ひをもし得るばかりの性なりし由、尤も史學に長じて、その著述に、月の行衛、池の藻屑、など人の知る處なるは、いふ迄もなく、明和八年の三月よりかける物語小説の類、數百卷の多きに至りぬとぞ。されど序記類の文章は、いまだ見も及ばずありしを、此頃彰考館の叢書の中に、この人の文章三篇を見出たるがめづらしく思はるれば、其一篇を寫して、寄贈するなり、なほつぎ／＼に寫してまゐらせてん、此麗子は、外宮山田住人慶德藤太夫の妻室にて、內宮權禰宜從四位上中西采女息信の妹なり。夫の藤太夫は、不學にて、唯小字を書くに巧みなりけれど、麗子の日々に草稿する文辭を、つとめて筆耕して、淸書したりといふ。天のかゝる文才ある婦人を生じ、その夫にさるものを配せて、たすけしめつるにや、いとあやしくくすしきわざなり。

明治丁酉の一月　栗里主人しるす

もいはずとか、國を治る器なん、世にありかたくすめり。中に元就の右馬頭といへるは、大江のながれにて、廣元の末葉なれど、いとあてなる人がらなれど、年月うつりかはり、さま〳〵みだれたる世を經ぬれど、今はかまくらのむかしのさかへには似ず、安藝の國にしるよしして住つゝ、祖父ちゝなどは其名を世にしらるゝ事もなくて過しつるに、此の人の時にいたりては、三尺のひかりもことさらにて、英たる名の四方にあまねく、いきほひは百千の軍をもしたがへつべきに、心さまはた三の德をかね、五の常を守りて、萬の民は草どとゝもになびきしたがへり、子どもさへあまたあるに、いづれがれとりさまなるなく、とり〳〵にれとなびて、ざいなどもかしこく家をゆづるべきは、更にもいはず、吉川のそこふかき謀、小早川のにごらぬ政は、左右の翼となりぬるより、四百年の基を起さしむべきなりや、初のほどは尼子にしたがひて、出雲に腰を折つるに、義興のぬしの我さまの人にせまはしうして、二王の軍の勝負を一人にかけつる晉王信にも劣らじとて、ねもごろにれとづれきこえしより、れはぢのかけによりぬ。かゝれど吉田のたゝかい出來りつゝ、出雲のかたにも世衡が間を用ひつれど、すべてたどからるゝはしとなれり。さどかりの師どもの競到れど、露恐るゝ事もなく、よく馬將軍があとを遂て百をもて五千をやぶりつゝ、唯飛將の龍城にあるがごとく、此國にては千劍破の昔にも通へり、程もなく大内の家亦霓裳の曲をれどろかして、一別四千里の思ひになやむあり。これはた墻ねの內の鬩なれど、從者みなそむきて、うらみをむくいん人だになし、さるに唯一人心を發しつゝ、嚴島に赤壁の

ふるきためしをおもはせ、雪の夜に涯をわたりしよりも、功のすみやかなりしかど、打つゞき、多くの國たひらぎつゝ、昨日今日のあたなりし人も、やがて馬前の卒となりて、追從しありき、いつしか山陰山陽の二つのみちひらけて、關の鎖もかたからず、賤が杵歌も聲しづかになん、なをあらたに筑紫のかたをも治めんとて軍を出しつれど、はか〲しきものもなくて、日數を經にけれど、さすがに處々の戍をこたるとはなけれども、ひまをうかゞひつゝ、大内は再ひ漢室を興さんことをはかり尼子も越王の恥をすゝがんとて、とり〲にさかひを侵しつれど、またいかさまにかと、うちかたぶく人々あるにぞ、さらば先近きうれひを斷てこそ、遠きおもひやりはせめとて、帥て歸らんとて、道のほどまことに千里の目をいたましめ、九折の魂を驚かすばかりなり、からうして國に來り着つゝ、又みだれたる處々そむく罪をとひなどして、國々の掟正しくしつれど、幾程なくて仇の風もしづまりつ、すべて遠近の海山は波の立るもなく、雲の立居もやすらかになりゆくにぞ、今はとふ事なげなるに、唯わりぬ事とは、霞の衣逆さまに着たる歎なん、なべての世のありさまとはいへど、いと口惜うころ。されど二葉の松の生先みえたるなん末たのもしく、又なき形見なめれ、終には領すべき國十にもあまりぬれど、天が下にその名いちじるしくあつく、かたをならべ轍を同じうする人もなし、さるは弓矢のみちのみにもあらず、君に仕る志もまた切なれど、絕にしことをもつぎ、すたれたるを興さんの心遣ひもまめやかにて、御國讓の料をも調じて奉りしより君の御覺えもめでたくて位山わけ入ては椎柴を折り、又大宮人の心さまにもかよ

ひて、いとまある折々は、さくらをかざし、もみぢをめでゝ、言葉の色をそへつゝ、和歌の浦路もたどるまじけなり、かく六の國もたひらかになりぬれど兩鬢の霜もかくれなく、古より稀なりといふなる春秋も過ゆくに、のこりのよはひゆたかにたもつべき菟裘の地をだにトす、唯明暮攻城略地の謀怠らで、露宿風餐の辛苦に堪つゝ、末葉の榮をのみ心にかけ、本意たがはで正木のかつら永くつたはり、今の世までもそのいきほひことなるは、一人のいさをしによれり、むべしも龍門原の土に、骨をうづむといへども、のこれる名の芳はしさは、又たぐひあらんや。

うづもれぬ光りぞ世々にのこりける
　　つるぎはあきの霜となれども

○寛云本文に標注あり、麗子が自注と思しけれど左にしるし附て讀者の參考に備ふ。

陸奥羽林、毛利陸奥守元就也、羽林は少將唐名○夫木寶とは玉をはいはず君のため國を治るうつはもの也○廣元の末葉、廣元より十三代なり○今はかまくらの、源賴朝公東八ヶ國を打したがへ上洛せんとし給ふ時後白川法皇に博智の一兩人東へ下したまはりさぶらへと奏したりけれど、大江廣元と齋院次官親能とをかまくらへ下し給ひ、親能は範賴義經に相傳て九州の戰に赴き廣元は賴朝の傍に在て、卿征夷大將軍に補し給ひけるより、廣元後見して入道の後覺致と號す、かまくらの柱礎たり○安藝國に、廣元より七代の孫師親後に元春といひし、觀應元年石見國佐波善四郎が足利直冬に一味して反せし時、江の川先陣して功ありける賞に、安藝國吉田庄三千貫を領せり○れはち

父、後拾遺輔親のれゝちむまこすけらか三代までにいたゝきまつるすべら大神」此歌の詞にてかけり○此人の時に至り、元就をさせるなり○三尺のひかり　すべて元就を漢高祖に比して書り朗詠三尺劍光氷在手、同じく漢高祖三尺劍坐制ニ諸侯一なせいへり○三の德　智仁勇なり○五の常　仁義禮智信○四百年の基　漢高祖提ニ三尺劍一起ニ四百年基一○尼子は佐々木の一族なり○二王の軍、項羽高祖なり○齊王信は韓信なり○れはぢのかけ大内を樗によせていへり○出雲のかたにも、种世衡齊澗城といふ處の守たりし時、罪ありしとて其臣將を杖にて打けれど其臣夜走て敵陣へ入りけれど、敵將誠にれもひて召仕けるがうちに、其兵權を得て歸り世衡にかたりける故世衡一戰に利を得たり是を世衡が間といへる也○馬將軍　馬燧百騎を以て賊の五千人を破りしなり、光胤といふ者吾未以レ少衆を擊事馬將軍が如きを見ずと、讃美せしなり○飛將の龍城　李廣を飛將軍といへり王昌齡の詩に但使ニ龍城飛將在一不レ教ニ胡馬度ニ陰山一といふをかりて出せるなり○大内の家　唐玄宗帝の何心なく楊貴妃に霓裳羽衣の曲を奏させて樂みましゝける前に安祿山が反して攻入しを比していへるなり○一別四千里　杜律洛城一別四千里○尼子も亦越王の、越王勾踐吳王夫差と戰たまひしに其軍敗せしかど、會稽山にこもりて、降參せられしに、吳王許して助け給ひしが、つひに國にかへしたまひけれど、勾踐其恥をすゝがんとて行住坐臥に汝會稽の耻を忘れたるかと云けるが、其後吳王を亡しけり○二葉の松　隆元の嫡子輝元をいへり、源氏澪標の卷末遙き二葉の松に引はくれ

いつかてたかきかけを見るべき○領すべき國十あまり、大内尼子の領知を合して領したまへり、出雲、伯耆、因幡、隱岐、石見、備後、備中、美作、周防、長門、筑前、安藝、其外備前宇喜多、播州別所等も旗下となりし也○御國讓料　正親町院踐祚ありしが國々亂れ御即位禮四年侍られざりしを、元就其料を上給ひて大禮を行はれしをいへり○菟裘の地　左傳魯隱公營菟裘地あり俗云隱居の事也、本朝文粹前中書王菟裘賦あり○路地　路は掠と云に同じ、征伐する事を云、又道ならずしてとるを云○露宿風餐　風餐露宿と云も同し轉倒してかけり、卓氏藻林に出行して外にあるといふを云り○むべしも龍門　朗詠集龍門原上土、埋レ骨ヲ不レ埋レ名ヲ○芳はしき、王維か詩に縱死猶聞ニ俠骨ノ香ヲ

雨月物語（つゞき）

故人　上田秋成

淺茅か宿（二）

此時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに闇けれど、舊しく住なれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒たきまゝにすさみて舊の道もわからず。ありつる人居もなし。たま〳〵こゝかしこに殘る家に人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね。いづれか我が住し家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧れし松の聳えて立るが、雲間の星のひかりに見えたるを、げに我が軒の標こそ見えつると先つ喜しきこゝちしてあゆむに、家は故にかはらでおり、人も住と見えて、古戸の間より燈火の影もれて

輝々とするに、他人や住、もし其人や在すかと心躁しく、門に立よりて咳すれど、内にも速く聞とりて、誰と咎む、いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞く、夢かと胸のみさわがれて、我こそ歸りまゐりたり、かはらで獨自淺茅が原に住つることの不思議さよといふを、聞しりたれど、やがて戸を明くるに、いといたう黒く垢づきて、眼はおち入たるやうに、結たる髮も背にかゝりて、故の人とも思はれず、夫を見て物をもいはで潸然となく。勝四郎も心くらみて、しばし物をも聞えざりしが、やゝしていふは、今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき、去ぬる年京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰しかど、總州に避て禦ぎ給ふ。管領これを責る事急なりといふ、其明雀部にわかれて、八月のはじめ京を立ちて、木曾路を來るに、山賊あまたに取こめられ、衣服金銀殘りなく掠められ、命ばかりを辛勞して助かりぬ。且里人のかたるを聞ば、東海東山の道はすべて新關を居て人を駐むるよし。又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し總州の陣に向はせ給ふ。本國の邊りは疾に燒はらはれ、馬の蹄尺地も間なしとかたるによりて、今は灰盡とやなり給ひけん。海にや沈み給ひけんと。ひたすらに思ひとゞめて、又京にのぼりぬるより、人に餬口て、七とせは過しけり。近曾すゞろに物のなつかしくありしかば、せめて其蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせんとは努々思はざりしなり、巫山の雲漢宮の幻にもあらざるやと、くりことはてしぞなき。妻、涕をとゞめて、一たび離れまゐらせて後、たのむの秋より前に恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨て、海に漂ひ山に隱れば、

適に殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便よしとや、言を巧みていざなへども、玉と碎ても死の至きにはならはじものをと、幾たびか辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども君は歸り給はず。冬を待、春を迎へても消息なし、今は京にのぼりて尋ねまゐらせんと思ひしかど、丈夫さへ宥さゞる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松にかひなき宿に、狐鵂鶹を友として、今日までは過しぬ。今は長き恨みもはれ〳〵となりぬる事の喜しく侍り、逢を待間に戀死なんは人しらぬ恨なるべしと。又よゝと泣を、夜こそ短きにといひなぐさめてともに臥ぬ、窗の紙松風を啜りて夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ熟く寢たり。五更の天明けゆく比、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被んとさぐる手に、何物にや籟〳〵と音するに目さめぬ。面にひや〳〵と物のこぼるゝを、雨や漏ぬるかと見れど、屋根は風にまくられてあれど、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽頽たる間より、荻薄高く生出で、朝露うちこぼるゝに、袖濕てしぼるばかりなり。壁には蔦葛延かゝり。庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。さてしも臥たる妻はいづち行けん見えず。狐などのしわざにやと思へど、かく荒果ぬれど故住し家にたがはで、廣く造り作し奥わたりより、端の方、稻倉まで好みたるまゝの形なり。（未完）

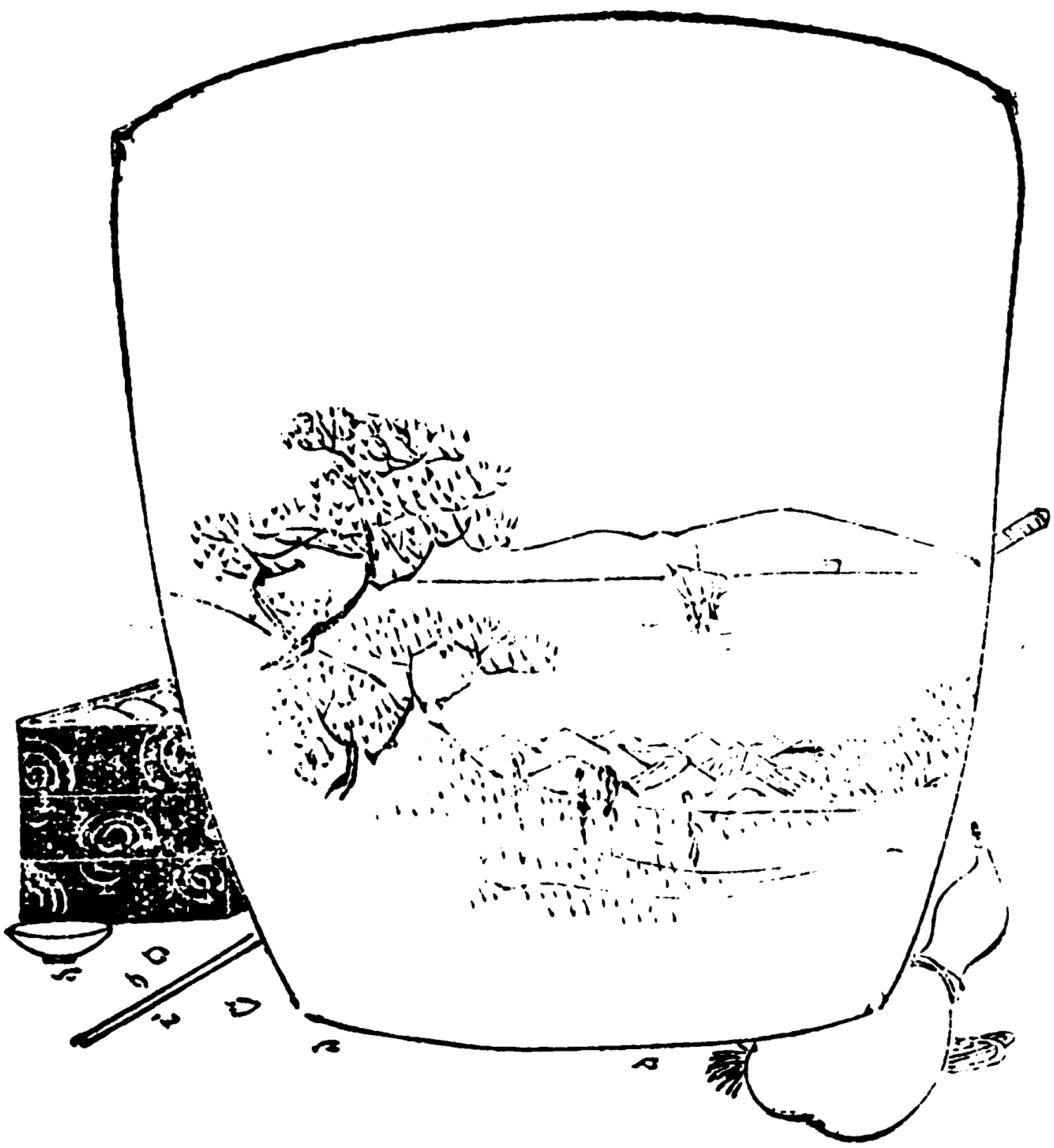
東京二十四景（十五）

蓬生の舍女史

御殿山

いま、東京にて、櫻の名所と云へど、人はまず指を

上野、向島、飛鳥山さては、小金井に屈すべけれど、いかでか知らむ、御殿山とて、音に聞えし昔の花の名所あるを。あはれ、浮沈、つねならざる世の中、名園もまた一榮一枯を免れず。御殿山、花爛熳とさきにけり、蓋し雲かと疑はれつゝ。と、をかしき調にまで、よみいでられしを見ても、その花の名所なりしことは、知らるべきに、翠輦東遷てのかた、さるやんごとなき人の所有となりて、遊ぶ人も少く、櫻さへすくなくなりゆきけるも、あはれや。かくて、一時は遊人全く絶えにしが、山もてる人、遊覽を許しけるより、この頃はまた遊ぶもの、あるに至れりと聞きぬ。さすがに品川海にのぞめる高爽の地なれど、景色はいとよし、花と海山とを並せ得たるは、他に類あるべうも思はれず。向島、小金井などは、花あり、川あれど



眼界せまく、上野はたゞ人家を見下し、飛鳥山はたゞ田野を見亘す。芝公園は品川海を見れども、なほせまし、御殿山のながめはいと、ひろし。まして花あるをや。この丘の餘勢、一起、一伏、西南に走りて、海晏寺の丘となり。八景坂となり、大森八景園となり、終に池上本門寺の丘となりて止み、逶迤として長蛇のわだかまれるが如し。更に都の方にのびては、芝三緣山となり、愛宕山となる。品川の市街眼下にありて、なほ都のおもかげをとゞむれど、うち渡す海づらには、心も自から寛くなりゆくべし。驛馬行旅のむかしのさま、今は見るに由なくして、滊車時に地上に晴雷をとゞろかし、はかなきむかしの夢のあとを殘して、七個の砲臺、巨艦の如く浮べり。一角の陸嘴、遠く海にいでゝ、夜、紅燈のかゞやけるは、羽田岬なるべく、多摩川の末も、こゝにいでぬ。遠帆ゆき、近帆坐する海をへだてゝ、一帶の青山の横はれるは、鹿野山なるべくその山の中にても、こんもりとうづたかきは、日本武尊を祭れる最高峯なり。これより左にたてるは、安房の鋸山にて、富士山もかすかに見ゆ。空すこし曇れど、これらの山、忽ち波路の末にかくれて、たゞ波濤の天に連れるを見る。此の海山の姿、今もなほ昔の如し、花の色香も、また異なりとも見えず。而かも、今年の人は、むかしの春を見ず、今年花を見るの人は、明年、花と共につゝがなきを期すべからず。御殿山の一榮、一枯せし間に、人はいかばかりの浮沈をか經し。ゆきてかへらぬ水にのぞみて、花はさきて、また散るなり。

朴平（十三）

白魚女史

山里の秋こそもの〳〵かなしけれとは云へ、百代、ちゝのみの父、はゝそはの母がねの傍去らず侍りし折りは、虫の音、鹿の聲、歌には哀れとも悲しとかこちしかど、たゞ古人の言の葉をまねびしのみにて、身にはさばかりもしみ〴〵おぼえざりしを、月の色、露の色、古里にながめしよりは、中々にかなしう心細き都の秋、かてゝ加へて、今日此頃は、文雄、日來は籠りがちと聞きし文雄、三日目、二日目の他出、初めは流石に歸へれる時は、毎時心よう朴平を呼びたてなどせしかど、此の頃は、百代のもろともに迎ふる事をいとひてか、遂には歸り來てもにがき顔、朴平をも呼ばずさへ成り行きしに、百代はねもあられぬ思ひ、早う散りも枯れもはてまほしう思ひ入るを、孃樣御心強う待たせ給ひてや、必ずわづらうて給はるな、さても至らぬ己れ、さし出でて呼びまゐらせて、なか〳〵痛はしや、お孃樣、かず〳〵のうきめを見せ奉る事のくやしさよ。かゝる事のお國元に聞えなば、大殿にも、母御前にも、さかむりはくやしう、朴平を恨みも憤りもさせ給はん。實に、實に、朴平もほぞをかむ恨み、悔みても泣きても、盡くされぬ恨み。されど、孃樣、いつかは若殿の御心、必ずとき奉らんに、朴平にまかせて、御心のどかに待たせたまひてよ。朴平が老腹、まだまだ朽ちはては仕らず。朴平候へた、さのみは心弱うればしめし給ふなど、毎時涙と共に慰むる老僕の心のいとをしさに、百代の幾度か思ひ返へす心。げに妾の心よわさよ。母樣のくれ〴〵のこし給ひし御言の葉、いかにいとはるゝとも、たゞしめらるゝも、

母様につれられてこし妾、伯母様ははしたなしともおぼしめすまじ。親のゆるし〻家にあるが、何のはしたなき事のあらんと、强ひて思ひを引きかへすあづさ守、百代が袖のしぐれは乾きもせぬほどに、世はいつかあらたまりて、初春とさへなりぬ。

今日は元旦、年のはじめ、心からうちとけて、人をも祝ひ、身をも祝ひ、今年は必ずよろこばしき事々、母様にも聞えまつらんものと、心も色もうるはしく、百代は疾くくみ上げし若水に、顔をも心をも洗ひきよめて、心からいさめど、日の光りも誠にうら〳〵とめでたくさしのぼるに、文雄もとく起き出で〻顔など洗ひすまし、まづ文机にさし向ひ、兼ねて用意の端書とりて、認むる年賀状に、去ぞしは餘念なきもの〻如し。

雜煮屠蘇などとりそへて、百代は持ち來り、うやうやしう新玉の壽のぶれど、彼方は變らぬつれなさ。ふつ〻かにたど〳〵しくは侍れど、墨跡だに見ゆるばかりにて宜しくぞ、手つだひまゐらせんかと云はんとせしが、否々さし出でがましとそのま〻に立ちて、くりやの事、何くれとはたらき、またうかゞふ文雄の書齋、文雄が文をも書き終りしを見て、それ妾が函に投れまゐらせんと云へど、賴まぬものをと云ひげにて答へもせず。

なげくまじ、〳〵、今日のみは如何なる事ありてもと、百代は心よりは〻笑みて、その文かきつくし給はゞ、妾がいだし參らせん、れん祝の餅とく召しませ、かへ給はん折りは朴平にとて、重ねて云ふに、文雄も是非なげに、なげ渡す郵便、拾ひあつめてしづかに、其處をたち。外へ出でながら流石にかへし見る文の面、いつも古里へまづ年賀の禮、端書

にてれてし給ひ、やがてつゝきて玉章して父上が許へれてし給ふ習ひ、今年もさはかと、うち返し、うち返し、見れども〳〵、古里への名あてあるはなし、もしは取りれとし行きてかと、再び書齋見たれどもあらず、さては數多き中忘れ給ひてかと思へど、云ひもならねど、そのまゝに過すほどに、昨日あつらへれきし車夫も來りて、うき世の禮、れくれぬ程にと出でたつに、百代は羽織よ、帽子よと、萬づ甲斐〳〵しうふるまふを、彼方はにが〳〵しげに、もぎとる手元に、思はず百代が面見る朴平、百代はなほもしとやかに手をつき、御機嫌ようれ歸へりをと送るまに、彼方は早う車きしらせ立ちて見かへりもせぬげなり。

毎春、此の禮のみは、流石に、文雄もかゝざりしかど、二三時頃には早くも歸り來りしを、今年は日くれてやう〳〵十時過ぎ、そのあくる日も何處へか出でゝ同じ頃まで、三日も四日もまた他出、古里へ送る手紙も、今年は認めぬやうなるに、さてはと胸うつ百代、かなしや文雄樣は、父上までをれとしはて給ひてか、かなしや、〳〵文雄樣、あまりなり、あまりなり、妾は如何にれとしめもいやしめもなし給へ、父上をまでれとし給ふとは、あまりになさけなし、なさけなや、文雄樣、父上は決して自ら如きはしたにはれはさぬものを、口惜しや、返す〳〵も口惜しきみづから、親をさへに、人にれとしめさせまゐらする妾が不幸、かなしやとむかりに思ひ沈めむ、忍び〳〵し心にまたくりかへさるゝ事々。日來は春とても、他出も遊ばさゞりしときく御身の、今日此の頃、ともすれば御家にすわらせ給はぬも、妾をいとひての御他出。きつと、〳〵、よく〳〵思ひいと





ひ給ひての御他出。さまでに君にいとはれ、おとしめられて、しかもかしこき父上にまで耻辱をあたへられて、いつまで生きんと思ふ我身なるべき、生きて何を待つべき我身なるべき。かなしや、あさましや、母樣、先き立ち參らすは、忍び難き不孝にはあれど、生きておとしめられんより、早う彼の世に行きて、伯母樣にだも、せめて嫁と呼ばれたさ。だうぞ母樣、文雄樣をも、朴平をも恨み給はでよ。みな自らが至らぬ身故、心故。必ずなげかせ給はでとばかりに、かつばと身をまろばせしが、また起き上り、如何になげかでと云ひ遣せばとて、しか〴〵成りはてしとき〻給はゞ、などか母樣が、なげかずに、なげかずに、おはしますべき。もし嘆きあまらせ給ひて、世をはやうし給はゞ。まして忠やかなる朴平、あれほどに心遣ふを、我身ともかくもならば、よもそのまゝにはあるまじ。さては文雄樣の御名のけがれ、片時も惜しかるべき此の身にはあらねど、それがいとほし、これがくちをし、心に殘りてと、あやなくかきくるゝ窓の邊近う、孃樣おはすかと聲かくる朴平。孃樣、見そなはせ、めづらしう今日は梅が一輪こぼれ出で侍り、之はいたう伯母御前のいつくしみ給ひし梅、今も匂ひは變らでと慰さめ貌に、朝ぎよめしかけての朴平の言葉に、百代もいそぎ涙ををさめ、障子あけてうち亘し、伯母樣のいつくしみ給ひし花とならば、一枝とりて給はれ、鶯のとはぬ程に、のう朴平、あのほゝ笑みたる枝を、階子かけてもとりてよと、わざとのび上りて見はやせば、朴平も箒うちすてゝ、勅ならばと立ちよる後髮、むら消えの雪よりも白うなりまさりぬ。



文林

翠松　近衛忠熙

はる秋の花もみぢにもまさりけり
冬もときはのまつのみどりは

山影寫水　東久世通禧

木枯のふきあらしたるふゆやまの
うつるもさむし庭のいけみづ

寒松　久我建通

常盤なる松のみさをはやまかせの
はげしき冬ぞあらはれにける

氷　鍋島直大

きのふまでめでし氷もふゆのきて
見るさへさむくなりにける哉

寒夜衾　長岡護美

深き夜の閨のあれまのかせさむみ
ひとりふすまを誰とかさねん

外島　押小路公亮

濱まつの葉山のうみのあれぬ日も
をきの外島はみえみ見えずみ

磯雪　前田利鬯

よる波のほかに白くも見ゆるかな
磯邊のまつにつもるしらゆき

山家落葉　黒川眞賴

我山の木の葉ちるなりあはれまた
ことしも冬になりにけらしも

竹久緑　宮地嚴夫

いつ見てもいさゝ村竹いさゝかも
かはらぬものはみどりなり鳬

社頭鶯　鎌田正夫

ともし火もまだ見ぬながら稲荷山
夜はわけぬらしうぐひすの鳴

世路如夢　三浦千春

ありてなき此世はゆめか夢ならで
むかしのまたも見ゆべき物を

狐ねはうしきて玉もたるかた　仝

いなり山かみのたからも身を守る
こゝろの玉のはかやなからむ

三井寺　藤井行麿

親と子とめぐりあふみの三井の鐘
つく〳〵つきぬねにしをぞ思ふ

新年鶯　三輪義方

年たゝぞやがて聞かんと思ひつる
こゝろにかなふうぐひすの聲

島雪　鍋島榮子

とくはしる車にのりてふるゆきを
いざ見にゆかん松がうらしま

神樂　蜂須賀隨子

いとたけのふしぞゆかしき千早振
神代のこゑもかくやありけん

雪中友　前田朗子

むつましき友とかたりてふりつもる
雪みるけふぞたのしかりける

竹霰　日野西廣子

竹むらにわられたむしる音きけむ
ひをけのもとも寒けかりけり

雪中祝　松平健子

降雪のやまをなしたるみつぎもの
あまりある代ぞ豊けかりける

谷鶯　北島以登子

谷ふかみまだ消えやらぬ雪のうちに
珍らしくなくうぐひすのこゑ

長谷　小川直子

汐路ふく風にたぐひてきこゆなり
はせのみてらのいりあひの鐘

夜落葉　三宅龍子

終夜れちぞのれとのたえぬかな
ひるはちるとも思はざりしを

落葉深　鶴久子

かきよせてたく人もなきわが岡の
落葉はやまとなりにけるかな

雪中鶯聲　中島歌子

うぐひすの鳴つるまぞを明たれぞ
梅が枝しろくゆきふりにけり

小野小町　柴田靜榮子

花のいろのうつろひやすき人のよの
ながめのうちに託ちはてけん

瀧をよめる歌　海上壽子

足日木の、山路をわけて、はろ〳〵に、わが來て見れぞ、山姫の、くり出す糸か、山姫の、さらせる布か、いとも白く、落ちくる瀧は、こゝしき、岩ほにくだけ、白みたてる、木根にみだれて、ちりにちる、眞玉白玉きえずあらぞ、衣につゝみ、うせずあらぞ、緒にぬきとめて、敷妙の、家なる人の、つとにせましを。



雜報

皇太后宮陛下

嗚呼 哀哉

皇太后宮陛下は、一月十一日を以て、終に崩御遊ばされたり。

聖上の御歎きは 拜察し奉るも畏れ多く、覺えず涕涙滂沱たり。我等臣民、亦喪葬に伏して、慟天哭地、深哀痛悼の至情に堪へず。記し奉るも畏れ多かれど、茲に謹みて、陛下御登遐前後の御摸樣を略叙し奉り、普く江湖の孃に告げ參らせん。

皇太后陛下は、本月初め、御風氣にわたらせらるゝ由漏れ承り、臣民皆恐懼、一日も早く御快愈あらせられん事を祈り奉りしに、其の甲斐もなく、陛下の御病勢は、其の後益〻重らせ給ひ、去る八日午前には、頓に御增寒わらせられ、續て御發熱四十度、御脈百十四、御呼吸三十、御胸痛も在らせられて、急性肺炎の御重症とならせられたれど、侍醫は心をこめて拜診に怠りなかりしが、其の後の經過宜しからず、十日の御容体を承はるに

御容躰書

一月十日午前八時

御体温 三九、三　御脈搏一一六　御呼吸四〇

九日午後六時三十分　玉子一ッ　氷一切

同　八時　アイスクリーム極少々
同　九時　御湯ノ下二匕　葡萄酒極少々
同　十時　牛乳猪口二ツ餘
同　十二時　牛乳猪口一ツ　御湯ノ下一匕
十日午前一時より六時まで　牛乳一合五勺
同　七時　玉子一ツ　牛乳猪口二ツ

昨夜御胸痛御呻吟御苦痛の御摸樣被爲在候に付本日午前三時御皮下注射奉上候處稍々御安靜前後二時間程御睡眠被爲遊今朝九時半拜診御右側御肺炎の御場所は少しく御增進の方に奉伺昨日來御熱度四十度には達せられざるも御脈御呼吸は却て御增數に入らせられ御總体御疲勞は益々御增進被爲遊候樣奉伺候

明治三十年一月十日

池田謙齋
橋本綱常
岩佐純
三浦省軒

仝日午後は、御病勢逐時御增進、御左右肺とも炎症蔓延、御体温、御脈搏、御呼吸等、左記の通りにして、御脈質至て宜しからず。御心臟追々麻痺、御肺水腫の徴候あらせられ、甚だ御大患に渡らせらると承はる。

一月十日午後六時
御体温　三九、五　御脈搏　一二六　御呼吸　五〇
同　日　午後十時
御体温　三九、三　御脈搏　一二六　御呼吸　五六
十一日午前六時
御体温　三九、　御脈搏　一二六　御呼吸　五八

十一日午前の御容体を承はるに

一月十一日午前九時
御体温　三九、一　御脈搏　一二八　御呼吸　五八
一月十日午後八時二十分牛乳四〇〇
同　日午後十時三十分牛乳八〇、〇
同十一日午前三時御湯の上極少々
同　日午前四時五分アイスクリーム三七
同　日午前四時四十五分御湯の上一七
同　日午前二時三十分より同七時まで
牛乳全量一七五、〇

昨夕上申後專ら御脈力保護の御手當奉差上候處一時は御應じ有之候得共暫時にして再び舊に被爲復候
右は畢竟御病勢御增進御疲勞御强き故と奉伺候
現今の御摸樣にては何時御急變の程難計御儀と奉

存候
乍去續て御脈力保護の御手當奉差上居候間萬々一僥倖にして御脈力御衰弱不被爲遊其中御分利に被爲傾候はゝ誠に以て望外の仕合と奉存候此段上申仕候也

エベルツ
池田謙齋
橋本綱常
岩佐純
岡玄卿
鈴木愛之助
森永友健
三浦省軒

仝日午後四時より、御脈細數、御呼吸、御困難、御疲勞加はらせられ、仝五時三十分頃より、御脈不整御四肢、厥冷、御病勢益々御增進、追々虚脫の御徵症備らせられ。仝六時終に　崩御あらせられたり。

嗚呼

陛下御諱を夙子と申し奉り、故從一位九條尚忠公の第六の御息女にして、天保四年癸巳十二月十四日（陽暦一月廿三日に）御生誕ましまし、嘉永元年十二月十五日、御齡十六歲を以て入內、同六年五月七日、御齡二十一歲を以て准后宣下、慶應四年三月十八日皇太后宣下あり、明治三十年一月十一日、寶算六十五にして崩御あらせらる。

○陛下の御事蹟は十一日以來、都筑圖書頭主任となりて取り調べに着手したるが、今其の　御略歷を承はる

孝明天皇女御藤原夙子。准三后從一位九條尚忠第七女
御母唐橋經子前大納言正二位唐橋在熈女
天保四年癸巳十二月十四日庚戌御誕生
弘化二年乙巳九月十四日壬申明宮（孝明天皇）御息所とならせる
嘉永元年戊申十二月七日丁未敍㆓從三位㆒
嘉永元年戊申十二月十五日乙卯入內
嘉永元年戊申十二月十六日丙辰爲㆓女御㆒
嘉永六年癸丑五月七日辛亥准㆓正三位㆒
嘉永六年癸丑五月七日辛亥准㆓三后㆒

生二順子內親王一第二皇女
爲二今上天皇實母一
慶應四年戊辰三月十八日丙寅皇大后宮宣下
明治廿一年一月十一日勳一等
明治三十年一月十一日崩御

○皇太后陛下の御仁德　記し奉らんも畏こけれど　皇太后陛下には、御登遐あらせ給ふ御際迄も、御氣性毫も平生に變らせ給ふことなく御病苦を忍ばせ給ひて、御側に侍りける人々を勞はらせ給へるは更なり、參內伺候の人人にも、快よく御語物あらせ給ひ、取別けて兩陛下御對面事畢り、御還幸啓あらせ給へる後には、皇太后陛下には、杉皇太后宮太夫を召させられて、早速に兩陛下に返禮の御使として差立てられ　皇太后陛下御口づから、いと細々との御口上を授けさせ給ひしは、御危篤の御容態とも覺えざる迄なりしとぞ。

兩陛下の御對面あらせし後、幼き御孫宮の御對面あらせられ、御自ら新調衣服の賜物あらせられ、次には皇族御息所に拜謁を賜はりて、一々に御懇の御挨拶あり、尙は御伺の爲め參內し居られし、各親任官夫人の方々にも拜謁賜ふべき由聞えられけれども、斯くては益々御容態に御障りあらんも計り難けれど、侍醫の人々御諫め申上げゝれど、左有らむとて、皇太后宮亮を召させられ、いと懇なる御挨拶を傳へしめ給ひしと云　御仁愛のほとあふぐもいとたふとけれ。

去程に、御容態よからず見えさせ給ふ午後五時陛下の御姪に當らせらるゝ大谷光塋師の令息光演師の夫人には、新橋へ着せられ、直ぐに青山御所に參內せられし時は、同じく六時前にていとも危うく見へさせ給ひしが、　陛下には御側近く參れる夫人を御覽ぜられて、御機嫌うるはしく、『扨も大きくなり給

ひしよ」と仰せられしてふ御名殘の御ことゞもとぞうけたまはる、記し奉るも涙の種になん。

○皇太后陛下の御逸事　記し奉らんも恐れは

かれど、陛下には、御幼少よりいと御聰明に渡らせられ、御年十六にして入内遊ばされし折には、夙く御歌も優れさせ給ひ、且つ御能書の御譽れも高かりき。御書の風は、宸翰様と申すにて、御手本は、故の有栖川熾仁親王殿下まゐらせ給ひけるとかや。後、尊融親王の御書なども交へ習はせ給ひけりとなん。又其の御發明なるにつけて、御行儀もいとたゞしく、また下々を憐ませたまへる御心も深くましましけるにぞ此れぞ重なる御譽とならせられたまひて、入内の選には中らせ給ひけるとなり。又々日の御科程として、讀書、香、手習、有職の事、裁縫なんど習はせ給ひけるに、それらの事みな御堪能にまし〳〵て、よろづに通じさせ給へり。されど、れんさが御謙徳にまし〳〵て御歌なども、容易らは人に示

し給はず、をりふしの御興に、御詠あらせ給ふを、

其の道のものども承はりて、あはれうるはしき御詠に敬服し奉るも多かりしかど、何れも皆とり棄てさせて、御郷家なる、九條家にすら賜はせられたるもれはせざりしとぞ。

又、明治十八年の頃よりは、青山御所に宮任の女官を初め、公卿、華族の、夫人、令嬢に、養蠶のわさつとむべき旨の御沙汰あり。四谷の御料地内に桑園を設けさせ、忝しけなくも、御手づから桑を摘ませ蠶を飼はせ給へるより、九條家を初め、此の御趣意を承はれる心ある夫人方は、孰れも参仕して、御手傳ひ申し上げる程に、廿四五年ごろよりは、恐れ多くも、繰らせ給へる御糸にて、御衣をも織らせ給

へるはせにならせ給ひしとなん。あなかしこ。

○行幸、行啓　皇太后陛下の御病勢危篤に陷らせ給ふや、　天皇　皇后　兩陛下には、特の外宸襟を惱ませ給ひ、御病氣中を以て侍醫の御留め申し上げたるにも拘はらせ給はず、供奉の方々を急がせ給ひて、去る十一日午前八時四十五分　兩陛下御同列にて、御出門、青山御所へ行幸啓あらせ給ひたり。斯くて　兩陛下の御參殿あらせ給ふや　皇太后陛下に親しく御對顏、色々御物語あらせ給ひて、午前十時三十分、御還幸啓あらせ給へり。恐れ多きことなれど　出御の砌　兩陛下を見上げ奉るに、御瞼の邊、あからませ給ひて、深き御歎きのほどもあらはせられ、供奉の方々、皆はふり落つる涙せきあへざりしとぞ。又　皇后陛下は、御還啓の際、御馬車の内にて、始終御手巾もて、御顏を蔽はせ給へりとなん。　兩陛下とも御病中を押しての御見舞、其の叡慮を惱ませ給ふこと洵に御至孝と申上げ奉るも畏こし。さるにても　皇太后陛下終に崩御遊ばされし今日　兩陛下の大御心は如何ばかりぞや、拜察し奉るも畏れ多けれ。

○皇太子殿下御還啓許させられず　皇太子殿下に於かせられては、舊臘より御異例に渉らせ給ふより、沼津なる離宮に轉地御療養遊ばされ、今尙は御滯在あらせられしが、今回悲む可くも　皇太后陛下崩御の御急電に接し給しかば、早速御還啓遊ばさる旨天皇陛下へ申上げられしも、殿下にも御不例にて御避寒中にましませばとて、御允許あらせ給はざるにより、殿下には、黑川東宮武官長をして、代りて御見舞申上げ給ひたりと承はる。

○御親電　皇太后陛下崩御に付　天皇　皇后

兩陛下の御宸憂は、今更恐察し奉るだに畏きことの極みなるが、左るが中にも與國との國交には寸刻も大御心を離れさせ給はず、訂盟國の各皇室、及び大統領に向け、畏くも、特に御親電を發し給しやに洩れ承る。

○各皇族殿下の天機伺　皇太后陛下崩御に付、小松宮彰仁親王、同若宮依仁親王、伏見宮貞愛親王、有栖川宮威仁親王、閑院宮載仁親王、華頂宮博恭王等の諸皇族殿下は何れも十一日午前十時より續々宮中に參内せられ　兩陛下の天機を伺ひ奉られたり。

○皇族御歸京　菊麿王、同妃範子兩殿下は去る九日京都より、恒久王、昌子女王、貞子女王、武子女王各殿下は十日神奈川縣三浦郡葉山村より各歸京あらせらる。

○御弔詞　皇太后陛下崩御あらされしに付、各大臣を始めとし、文武の百官は皆參内して天機を伺ひ奉り、それ〴〵御弔詞を申し上げ奉れり。其の外各樞密院顧問官、貴衆兩院議員、各府縣知事、各外國公使等、或は參内し、或は電報を以て、各御弔詞を奉呈せり。特に各國皇帝、大統領よりは、電報により公使によりて哀悼に堪へざる旨を申し上げ奉れり。

○廢朝仰せ出さる　皇太后陛下崩御あらせられたるに付、本月十二日より五日間廢朝仰出されたり。

○宮中喪　皇太后陛下崩御されられたるに付、宮中喪左の通り仰出されたり。

一週年　自明治三十年一月十一日　至明治三十一年一月十日

一期　二十五日
二期　二十五日
三期　三百十五日

○國中喪　皇太后陛下崩御あらせられたるに付、本月十二日より三十日間、國中喪仰出されたり。

○音曲停止　皇太后陛下崩御あらせられたるに付本月十二日より左の通り歌舞音曲を停止せられたり。

一　營業に係るものは十五日間
　但し御發棺及御埋棺此の期間後なるときは各其の當日尚之を停止す
二　其の他のものに在ては三十日間

○國喪中の國旗　皇太后陛下崩御あらせられたるに付、去十二日より三十日間、國中喪仰出されたるに付ては、同喪期間、臣民に於て哀意奉表の爲め、國旗を掲揚するものは、左式に依るべき旨、本月十三日、內閣より告示ありたり。

一前期十五日間は旗竿の上部に旗の長さに齊しき黑色の布片を附す
二後期十五日間は旗竿の上部に旗の長さの半に齊しき黑色の布片を附す
　但御發棺及御埋棺の當日は前期の式に依る

○皇后陛下の御喪服　皇后陛下の御喪服は、御洋裝を廢し給ひて、專ら古例に據り、白羽二重の御衣に鶴喰色の御衵、柑子色の御袴を穿かせ給ふよしにて、地質は何れも麻もて製り、第一期、第二期には右の御裝にて御喪に居らせ給ひ、第三期には絹もて製りたる鈍色の御衵、萱草色の御袴に替へさせられて、同じく御喪に居らせ給ふやに漏れ承る。因に記す、御宮城內に宮仕へ遊でせさるゝ各高等女官及び　青山御所に御かしづき參らせたる各高等女官、并に中山二位尼も　陛下御同樣の服裝を穿かせらるゝやにうけたまはる。

○死刑宣告及執行中止　皇太后陛下崩御あらせられたるに付き本月十二日より十五日間、及御發棺御埋棺當日、死刑宣告及執行を停止する旨、內閣總理

大臣より司法、陸海軍、及拓殖務大臣へ傳達ありたり。

○囚人の服役特免　皇太后陛下崩御あらせられたるに付、擧國哀悼の餘、定役に服すべき囚人は本月十四日より五日間、並に御發棺及御埋棺の當日、特に其服役を免ぜらるゝ旨、勅令を以て公布せられたり、但しその期間は、臺灣に在ては本令到達の日より起算するものなるよし。

右に付き警視廳監獄本支署に於ては、典獄より囚徒一般に、特免に關する勅令第五號を讀み聞かせ、此期間は最も謹愼して大恩典に浴すべしと言ひ渡したるに、多くの囚徒は　陛下崩御の御事を此時始めて承知し、何れも謹愼して、囚徒ながらも哀悼の微意を表したりといふ。

○文部省より各學校への訓示　文部省に於ては去る十二日　皇太后陛下崩御の御發表あるや、直ちに全國各府縣立中學師範學校、及び小學校に向つて、五日間休校し、哀悼の誠意を表すべき旨訓令したり又去る十六日には左記の通り心得べき旨全國各公私學校へ訓示せられたり。

一謹愼靜肅を專らとし深く敬悼の意を表せしむべし

一制服又は筒袖を用ふるものに在ては黑色の布片を左腕に纏はしめ其他に在ては左肩に適宜之を添付せしむべし

一制帽を定むるものに在ては黑色の布片を以て徽章を覆ふて帽を卷かしめ其他にありては適宜帽を卷かしむべし

一女生徒は服裝を成るべく質素にして目立つべき頭髮の粧飾を廢せしむへし

○御喪主及大喪使長官　大喪使長官を、去る十四日、有栖川宮威仁親王殿下に御任命あらせられたり、御喪主に就ては、豫て　至尊自ら爲し給ふやにも洩れ承り居りしが、十八日夜深更に及びて、有栖川宮威仁親王殿下へ御喪主仰付らるゝ旨御沙汰相成りたり。

○御葬祭齋主　皇太后陛下御葬祭齋主を從一位久我建通侯に去る十七日仰せ付けられたり。因に記す久我建通侯は、東京府知事久我通久の嚴父にして、元京都上加茂の宮司を勤め、　皇后陛下の御伯父に當られ、京都に於て大宮御所御用掛を勤め、頗る御恩顧深かりしといふ。

○大葬典例の調査　宮内省にては、今回の大葬に關し、我國古今の典例を詳査し、之を斟酌して、最も鄭重壯嚴なる大葬の典を擧げらるゝ筈にて、目下頻りに調査中の由なるが、聞く處に依れば、大葬に關する中世以後の典例は、封建政治時代に係る者なるを以て、今回に於ける大葬の好典例として如何はしき點も少なからざる故、申すも恐れ多き事ながら、今回は專ら　皇祖　孝格天皇の皇后及　皇考孝明天皇の大葬に關する典例に參照準據して御執行相成るやの說あり。尤も　先考大葬の當時は、將軍尙ほ政權を握有せしも、時運は頻りに政權奉還の機に迫りて、王政復古の實將さに顯はれんとする時なりしかば、其大葬も至極鄭重壯嚴を極めたる者なりと云ふ。

○大葬に付き御沙汰　畏こきあたりより、本月十六日大喪使長官へ、左の如く御沙汰あらせられたり。

皇妣の葬儀は、將來の表準とも相成るべきに付き一時臣民哀悼忠愛の感情に任せ、經費を貲らず、

夸張僭大に失し、皇考の葬儀に超越するに至るときは、却て皇妣の懿旨に違ふのみならず、則を後昆に垂るゝ所以にあらざるなり。宜しく豫め恰當の程限を立て、莊重に之を執行すべし。

○御靈移式及び御入棺式　去る十九日午後四時を以て、御靈移式、及び御入棺式を御執行あひなり、齋主久我建通、齋官臨司、二條の兩公、万里小路伯、唐橋子爵、野々宮子爵、松園男爵、正四位兒玉愛二郎、從四位九條道實の諸氏何れも古式に依りて鶴喰色の上着に、鈍色の下着の裝束を着し、光澤消し墨色の冠を頂き、藁靴を穿ちて奉仕せられたりと云ふ。

○御靈鏡　御入棺式了りて　御靈を御靈鏡に御移し申上げ奉り、豫て中の大廣間にしつらへたる、方三間半に三間の御靈場に、御靈鏡を安置し奉りたりと。

○御十日祭　去る廿日は、　皇太后陛下十日祭に當らせられ給ふにより、靑山御所内にて、其の御式を執行せさせ給へりと。

○御陵　此の程來御選定中なりし、　皇太后陛下御埋棺の場所は、本月廿日、愈々、京都東山泉涌寺内　孝明天皇御陵の北、凡そ八十間なる斜面地と御確定相成り、即時其の趣き、大喪使より京都派遣官へ電命を發せられたれば、彼の地に於ては、徹宵して土地の切開に着手せられたるよし。而して万一切開の結果良好ならずと認められなる時は、更に他の豫備地より御選擇あらせらるゝ筈なりと承はる。

○御陵の蓋石　至尊並に　皇族方の御陵墓は、必ず石棺にして、其周圍は石垣もて疊み、全上部を一

枚石にて蓋ふものなれど、先帝の御陵を經營する際にも、右適當なる御蓋石のなきに困難し、數名の人夫を所々へ出して搜索せしめたる處、幸ひにも、近傍なる宇治郡醍醐村山中に、大なる平石あるを發見し、之を發掘せしに、誠に人工を以て削りなせし如く、二疊敷餘ありて、厚さ一尺餘の見事なる靑石なりし故、即ち之れを右御陵に用ゐられたりとのことなるが、今回　后太后陛下の御陵墓も、御同様なるやにて、其筋にては目下右蓋石を搜索中なりと云ふ。

●れはみめぐみ　天皇　皇后　兩陛下の、つねに大御心をしもじもにそゝがせ給ふこと、今更の如く申上け奉るも恐れ多かれど、かゝる宮中御凶事の際にもかゝはらせ給はず、昨年十二月廿九日、神奈川縣下津久井郡吉野驛失火、罹災人民困難の趣き憐憫に思召され、去る十一日、兩陛下より御救恤として、金百圓を御下賜相成りたり。罹災民たるもの、感涙にむせばでやは。

●新年御歌會　本月十八日は、宮中に於て、御歌始めの式を擧行あらせ給ふ筈なりしが、御大喪に就て御中止と相成りしに、恐れ多くも　天皇陛下には、深き大御心を垂れさせ給ひて、去る十日の期限までに到達したる分を天覽あらせらるゝとの御沙汰あり既に兩陛下の御詠草も、御歌所に御下附と相成りたれど、御歌所長高崎正風氏は、深く陛下の御思召に感泣し、去る十日御發喪以前の分を取纏め、淨書の上乙夜の御覽に供し奉ることゝなれりとぞ。昨年は、全國詠進歌總計一萬千餘首なりしも、本年は、去る十日迄の分にて、一萬三千餘首に達し、尚は

其後遠隔の地にして期日後に到達せしものを合すれば、前年よりは餘程增加すべしとの事なり。

●兩殿下の御誕辰と三週年祭　陸軍大將小松彰仁親王殿下は、弘化三年一月十六日を以て御誕生相成りし事なれば、本月十六日は御誕辰に相當せるを以て、例年なれば、駿河臺の御邸にて、各皇族殿下を始め、國務大臣等を招待し、御祝宴を開かせらるゝ次第なるも、本年は　皇太后陛下の御喪中に付、總て御見合せ相成る都合なりと承る。又た同十六日は、故陸軍大將功二級有栖川宮熾仁親王殿下御薨去三週年の當日に相當するを以て、同宮邸にては祭式の御擧行あらせられたりと。

●毛利公爵の薨去　從一位勳一等毛利元德公には年來心臟病を患ひ、專ら療養にのみ心を盡されしが客年十二月に至り、病狀頗に增進して、遂に仝月二十三日薨去せられたり、行年實に五十八歲。公爵が安政年間より王事に盡瘁し、遂に維新の大業を翼賛して、以て明治の今日に至りし人にして、皇室の藩屛、國家の柱石たりしことは、人皆知れる處なり。

公は又和歌に巧みにして徒然の折には吟詠絕えず、左の三首は、數ある中にて最も秀逸のものなりと

○元日のあした大内に參りけるときいたく雪のふりければ

ふる雲に人の從來は絕ゑぬれど
　君につかふる道はありけり

○武内宿禰

百年を三度越ゑてもすめらぎに
　盡す必やれはせさりけん

○楠　公

淺川つゝみくねずはあた波も
　都にまではよせざらましを

かくて、公爵の葬儀は、國葬を以て仝月三十日、千家敬正、齋主となり、神葬式を以て擧行せられたりといふ。

●福羽子爵青山御所へ筍を献納す　子爵福羽美靜氏の住へる、南豊島郡角筈村に鬱然たる孟宗の竹林あり、年々始めて筍子を掘取るときは、先づ青山御所なる　皇太后陛下へ献じ奉るを例と爲せしが、今年も最早其の時期となりて、此程始めて筍は堀りけれども　陛下には早晏駕ましゝければ、責めて御靈の前になりとも献げまつらんとて、白木の箱に納めて幣をかけ、左の一首の和歌を添へて奉りけるとなん。

青山御所へまうで竹の子を供へまつりて
さゝげてしその竹の子をかたくしも
　ぬさとりかけてけふたてまつる

●孝明天皇祭の唱歌　高等師範學校附屬音樂學校に於ては　孝明天皇三十年祭御擧行の際、適宜の場所に於て、諸學校生徒に唱謡せしむるの目的を以て左の唱歌を出版せりと

作歌　本居豊頴
作曲　山井基万

むかしのひかり　今もなほ
たかくかゞやく　ひがしやま
のちの月の輪　中ぞらに
雲がくれしぞ　かしこきや
たれもへぞ今日の　御祭に
たれかむかしを　しのばざる
たれもへぞけふの　みまつりに

誰かみかげをあふがざる

●乃木臺灣總督母堂の訃音　乃木臺灣總督の母堂は、臺灣に病を得て、舊臘十二月二十七日、六十九を一期として終に黄泉の客となれり。始め母堂は本土出發の際より、聊か氣管支病の氣味にて、渡臺後も兎角閉ち籠りがちにれはせしと聞く、されど氣候風土の變遷より、遂に今回の訃音に接するに至りたる者乎。母堂逝去の報　兩陛下の叡聞に入るや、皇后陛下には殊に御不憫に思召され、祭粢料として金三百圓を下賜せられたり。

母堂本土を出發するに臨み、見送りをなしたる多くの知人に向ひ、老の身の餘命も短かきもの、他人に率先して、新皇土八重の汐路に渡り行くさへ中々に嬉しさまさるなるを、斯くも多くの人々に見送りを受け、且つは畏れ多くも上　皇后の宮には拜謁を賜はり、殊更らに有難き御言の葉さへ賜はりたるなど、此身の冥加空恐ろしと申すの外なし、此上は彼地に渡りて生蕃とやらの土となること、せめてもの本望なれと言はれたる金鐵の一言には、誰とて感じあへぬものはなかりしとぞ。今や此の言ゆくりなくも讖となりて、此の訃を聞く、悲むべし。

●よのかゞみ　孝は、百行の本と古くより教へ傳へたることどころげに尊とけれ。才藝學術の如何ほど透でたれども、孝の行ひなくばまた何にかはせん。都遠き北の方出羽の國に住める田村はる女は、この行のかゞみとなるべきかどを以て、舊臘十二月二十三日、賞勳局より、左の如く特例金を賜はりたり、多く得がたき人ならずや。

山形縣羽前國西置賜郡蠶桑村
佐藤粂次妻
田村るは

資性孝順善く舅姑及夫に事へ一家輯睦す舅姑中風を患へ尋て夫も亦疾に罹り自ら起臥すること能はず生計困乏なるも湯藥甘旨を進め承歡慰籍日夜衣帶を解かず看護其方を盡す舅姑相踵て歿す之に事ふる猶ほ生前に於けるが如し、誠志篤行洵に奇特とす、仍て其の賞として特例金二十圓下賜す。

●孤兒二十八人を養ふ　東京市麻布區霞町に住める、但木鵬といへるは、十二三を頭として、三四歳の乳呑子までを合せて、凡そ三十人ばかりの子女を養ひて、一家睦しく暮し居けるが、近隣のものどもあやしみて、如何に子福のものなればとて、三十人近くも子をもつはまれなり。且つ五六歳より七八歳までの子供多く、顔形さへ、兄弟とは思はれざるに、みなれ父さん〳〵と睦み戯るさまは、實の子としか思はれず、など〳〵、噂しあへるよしなるが、聞くところによれば、この但木鵬は、昨年三陸の海嘯に際し、彼の地に出張せしものにて、家は流れ、親に離れて、寄邊なき孤兒の路傍に彷徨して泣悲しむ有樣、明日をも知れぬ身の上を憐み餘所に見過すに忍びず、携へ歸りしもの、二十八人の多きに及びたるが、其中に十五六歳になる白痴の女子もあり、他は何れも十三より以下、乳呑子までにて、或る小兒の如き、砂の中に全身を埋めて、目ばかり出して居る處を救ひ上げたるさへありて、目下夫々養育の道を盡し居れるなりといふ。利にのみはしりて、義をしらず、人情日に薄き今の世には、誠に有難き人にこそ。

●本誌の附錄　は、もと、前號に添ふべきものなりしを、計らず彫刻などのおくれしため、本號に附けそふこと〳〵なしたり。この懷帋は、ことし、九十一歳の高齢にわたらせらる〳〵從一位公爵近衛忠熈公の御染筆にかゝりて、いともめでたきものなり。



敎之庭

一月廿日兼題　若水

天　東京麹町區元園町　戸塚てつ子

うら〳〵と出づる日影に誘はれて
汲むもうれしや千代のわか水

地　肥後國菊地郡城北村　徳永萬壽子

天の戸をいづる初日のかげまちて
くむもたのしき千代のわか水

人　陸前國登米郡登米町　及川千ひろ子

年毎にふり行く影は見えなから
名にめてゝくむ今朝の若水

秀逸　（二十首）

あらたまのとしのはじめの若水は　永井さい子
むすぶこゝろも濁らざりけり

朝日かけのどかにうつるわか水や　諸井貞子
ゆたかなる世の鏡なるらん

新らしくむすふもうれし玉の緒の　牧山きよ子
千代に延ふてふけさのわか水

老の身も寒さわすれて汲みにけり　住山幾子
千代のかけさす今朝のわか水

汲むからに清々しくぞなりにける　錦織くら子
年たつ今朝の千代のわかみつ

殊さらにすみまさりたる心地して　伊藤清子
掬ふもうれし今朝のわかみつ

澄みわたるとしの始のわかみつは　大森すみ子
濁らぬ御代のしるしなるらん

あら玉の年立つけさのわかみづに　三谷起美子
にごらぬみよの影は見えけり

けふことに汲む若水はみめくみの　吉村みさを子

八州にあまるしつくなりけり

老が身もわかきにかへる心地して　名取正代子
うれしくむすふけさのわか水

あらたまのとしのはしめの若水は　李家貞賓子
くむ心まてあらたまりけり

のとかにもとしたつけさの若水を　北川　花子
むすひてみよを祝ふうれしさ

老のなみよせくとしれと年たては　松岡　濱子
こゝろいさみてむすふわか水

君が代を千代といはひてわか水を　野中あさ子
むすふもうれし年のはしめは

車井のおとものとかにきこゆなり　下元もと子
今朝くみそむる千代のわか水

くみ上けてむすふにあまる若水や　日高かず子
大御めくみのあつくなるらん

鳥のなく聲をおそしとまちうけて　石川すけ子
おきてそくみしけさの若みつ

新玉のとしのはしめのわかみつは　大谷津こと子
くむ心まてきよくそありける

いさきよきとしの初のわかみつは　田中　冬子

心のちりもうかはさりけり

大空はまたかすまねとわかみつに　薬師寺芳子
くまはやちよの春のこゝろを

（以下原稿到着順）

くみあぐる手元やさしき若みつの　井出すゝの子
きよきこゝろは神そをさめん

門松のみとりのすかたわかみつの　佐々有鄰子
そこにうつろふ影をこそくめ

底ふかくすみかへる三井の若水を　佐々小琴子
今朝の餉にくみてそへはや

愛たくもけさ汲み初むる水の面に　田代　艶子
まつ若かへるかけそうつろふ

あら玉のとしを迎へてくむさへも　田代　綾子
嬉しさあまる千代のわかみつ

よへ汲みし水と同しきみつなから　丸山須磨子
いとすか〳〵し今朝のわか水

おのか井の水としいへと若みつは　鈴木美惠子
大みめくみのつゆにそありける

朝日かけきよくもうつる山の井に　進藤　元子
けさこそくまめ千代のわか水

としことにけふ汲みそむる若水に
うらやすくにの影は見えたり　大谷　友子

うつりゆく其の面影にはつる身も
むかへは嬉し今朝のわかみつ　畠山千代子

言の葉の花に咲き出てゝにほはなん
すゝりにくめる今朝の若みつ　畠山ゆき子

朝またきくむやわかみつ底きよみ
去年の星さへかけに見えけり　畠山百合子

君かためいく井榮井と祝ひつゝも
ひとり司くみはやすらむ　畠山　淸子

豊かなる色こそうかへ汲みあくる
ひさこにあまる千代のわか水　小池　賴子

朝日影ひかりまちへてわかやとも
くみはやすなり年のわかみつ　三好　策子

萬代もいはひて汲めるわかみつに
かはらでうつる影ぞたのしき　楠　精子

年たちてけさ汲みそむる若みつの
淸きをひとのこゝろともかな　島田　好子

新玉のとしをむかへてつゝ井つゝ
汲む手うれしき今朝の若みつ　中島　房子

年たちてくむわか水をむすふてに
あまるはちよの雫なるらん　小町谷里江子

しめはへてけさくむみつの雫にも
あまるは君か千代のかすかな　小町谷園子

わかつみとれもへはうつる星影も
昨日にかはるこゝちこそすれ　平山さと子

にひ年にくむ若みつはしかすかに
底よりすめるこゝちこそすれ　武田すみ子

のとかなる今朝汲みそめし若水そ
年のはしめのきよめなりける　錦織とも子

わかみつはそのみなかみの玉川を
猶あらたまのいくもゝよまて　星野　式子

汲みなれしこの井なからも若水に
われはことしも命たのめり　星野　仁子

幾千年つきぬこの井のわかみづを
汲みつゝいはふけふそ嬉しき　星野康世子

うれしくもけさたてまつる若水に
千代のはしめはしられぬる哉　森山　英子

神代よりちとせかはらぬ若みつを
君にさゝけていはふけふかな　福島きい子

新らしき年のはしめにくむみつを　わか水としもたか名つけけん　佐藤きよ子

治まれる御代もろともに榮ねよと　神にさゝぐるけさのわかみつ　村上登代子

幸なれと今こんとしをいのりつゝ　神にさゝくるけさのわかみつ　藤原　榮子

君かためちとせの後をいのりつゝ　わか水むすぶけふそうれしき　鷹津とし子

あけわたる空ものとかに若かへる　こゝちしてくむ山の井のみつ　河田ふく子

あたらしき年たつけふのわか水を　くむ心こそゆたけかりけれ　河田いし子

千代のはる待ちてけふ汲む若水に　のとけき空やまつうかぶらん　福原　韮子

たちかへる年のわか水くむことに　いは井の底も千代をますらむ　河野　文子

あら玉の年をむかへてれいか身も　わか井くみとる今朝の若みつ　甲斐荘いう子

めくりくるはるそうれしき車井の　千代のわか水くみそむるにも　仁井田とみ子

若ゆてふ春のはしめのみつくみて　老せぬ年をつまんとそれもふ　木川　里子

とし毎によるとし波もれたやかに　心もきよき御代のわかみつ　山口やす子

家毎にとしたつけさはわかみつを　ちよの初と汲みやそむらん　武政常盤子

千代かけて手にこそ結へ老らくの　友となるへきけさのわかみつ　無　名

新玉のとしのはしめにうちとけて　むすふもうれしけふのわか水　長洲餘野子

れき出てゝくむ若みつに影みねて　色もわかやくけさののとけさ　平山　房子

大御代のひかり長閑けき春の日に　わかみつ汲みて齢のへてん　鳥居きく子

大君のみひかりうけしわかみつに　くまはや千代の春のこゝろを　大田みち子

汲みあくる手にこそあまれ大君の　深きめくみの千代のわかみつ　坂田喜美子

えわかれし身にはあれとも若水を　くみてさかせん言の葉のはな　服部勝美子

年たちてまつくみそむるわか水に
　長閑なるひのひかり添ひぬる　鷹取　政子

年立ては水もこゝろをあらためて
　物あたらしきすかたなりけり　横田　秋子

汲みなれし井筒の水のきよけれは
　まつこゝろより春はきにけり　横田須磨子

年毎にれいまさりてもわかみつを
　年のはしめにくむそうれしき　高田きよ子

むすふ手のかけさへ清く塵もなし
　千代の祝にくゝめるわかみつ　長山　孝子

濁りなきこの大御代のみさかえは
　けさくむみつの清きにそしる　久松勢伊子

いつはあれと年立つけさはこと更に
　清くすみたる千代のわかみつ　重松たか子

心すむはしめなりけりあらたまの
　としたつ朝むすふわかみつ　中川浪江子

やとことにむすひていはふ若水に
　まつこそ千代の色はみえけれ　降田　槇子

かきなかす色も長閑にみゆるかな
　けさくみそめしみつの清きに　内田つる子

こゝろまてすみ渡りけり春たちて
　のとかにむすふけさの若みつ　清末とみ子

そのかみを思ひうかへて五十鈴川
　けさくみそむる千代のわか水　守山比古子

むすふ手に濁らぬ御代の行く末も
　くみてしらるゝけさのわか水　山田　瑋子

冬すきて又あたらしく立つ年の
　みつも若やき木のめはるかな　武田　玉子

新玉のとしのはしめのわかみつを
　くみて久しくいはふ御代かな　萩原　章子

かきくらす心のやみもはれ〳〵と
　くめるわか水いとゝさやけし　佐藤ゆり子

新らしき桶たつさへてくるま井に
　若みつをくむけさのうれしさ　植木とよ子

若みつにこそのけかれを清めつゝ
　けさあら玉のとしにあひけり　小倉根志う子

つこもりの禊にうきはなかしつゝ
　こゝろも清く汲むやわかみつ　諸井久良子

松か枝の千とせの影をにはの井に
　うつして汲めるけさの若みつ　館脇ます子

をさなきも老もへたてす新らしき
　年のはしめにくむやわかみつ　吾妻近子

汲みそむる人のこゝろのそこ清み
　めてたくみゆるけさの若みつ　林久子

老松のかけのすゑくむわかみつは
　まことに千代の雫なるらむ　大多仁眞子

くみそめしこの若水にときはなる
　御代の姿のうつるめてたさ　稻垣いき子

あら玉の年のはしめのことほきを
　かくも嬉しきけふのわかみつ　加藤きく子

又ひとつ年をとるをもわすれつゝ
　むすふもうれし今朝の若みつ　野よし子

若かへる松の緑のいろみえて
　くむもうれしきけさの若みつ　山下ふゆ子

新玉のとしたつあさにくむみつは
　きよきをしるの始めなりけり　青木春子

千年ふる松のみどりのいろこめて
　御代の初日をいはふわかみつ　矢島えい子

汲みあけて結ふ手にあまる若みつは
　君かめくみのゑつくなるらん　都志津子

一月廿日兼題　筆

天　横濱山手二百十二番　鈴木なほ子

身は竹林に生ひ立ちて、其かしらにふさ〳〵としたるみどりの黑髮裝ふをもて、あまねく世人にめではやされ、あるは幼子の學びの友となり、あるは姿いかめしき官人の、公の御つとめたすけまゐらせ、あるはあきうどの帳簿をかける小わらんべとなり、あるは孃君だちのやさしき御心を、よどみなう染めさせ、其齡やう〳〵たけて、戴く綫の漸うなりまさるにあらでは、世にすてられざる、いといぶかしき物こそあれ。この物、詩人の手に捉へられては、ゆかしき詩歌をも產み出すべく、歷史家の手に捉へられては、幾千代の昔にありし故事をもうつすべく、時と主とによりて、各其つとめを異にするも、あらゆる業に堪へざるはなし。そも此怪物は何ならん。此物げに何ならん。これぞ筆にてはありける。此筆よ、其いにしへより、世を益し人をたすけし事、いくそくなるべきか、數へつくさん事も難しかし。あはれ筆よ〳〵、汝はいとも世に忠義なる僕ぞや。汝が生命は短うて、世にありては幸なきがごとくなれど

に殘こすいさをはいと大いなり。いまはのきはまで、世のため人のためいそしむは汝なり。汝はいともいとも眞心ある僕ぞ。さるにても、世人が之に對する同情の薄き事よ、一言だに汝をねぎらはざるときは、いまし、さてぞ心ならればゆらめ。さもれ、今妾は其いさをめでたゝへて、世に訴へなん程に、筆よ慕下に心安かれ。

地

岡山市八番町　降田槙子

物と云ふ、物、何れも用なきは、なけれど、筆ぞかり、世に用多きは、あらじかし。花の朝、月の夕、思を述べんにも、嬉しき、ふしを書かんにも、はた、うき事を記さんにも、筆なくては、あたふまじ。そも此筆よ、たゞ細き竹の柄と、短き毛とを持ちたるのみなれど、そをもつ人によりて、或は尊き字ともなり。或はめでたき書ともなり、或は妙なる文章ともなるなり。筆あれぞこそ、遠き古の事も知られ、外國の樣も知らるゝなれ。されど、上は、かけまくもかしこきあたりより、下は、賤山かつに至るまで、各々皆こをもて、萬の用を便じ、智慧を開き、心をなくさむるの、具となすあり。己は、常に此筆を手にすれど、人なみ〳〵の、文字を書き得ず、いつも師の君に、笑はるゝぞ、いとはづかしき。さは云へ、たゆますつとめなば、いつかは人の後へにつく事も得べからんと、思ふも、いとをこがましや。

人

肥後國熊本市京町　木川里子

月の夕花の朝はさらなり、あはれなるをりふしにつけつゝ、心ひとつにあまる思をのぶる四の友、いづれとわきて睦じからぬはあらねど、文字てふものに跡をとゞめて、千早振神代の昔も、目のあたりみるこゝちし、あるは遠き雲ゐのよそにへだつる人とも、ただにさしむかひかたらふ思ひせられ、其いさをのわきていみじく、文の林にわけいり、學の道をたどり、机の島にうちむかひ、硯の海にうかぶ思の、もしは草かきあつめん人々の、一日もあらでかなはぬものは、筆になんありける。あなゆかしの命毛なるなか。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

筆は、心のたねを蒔きつくるものなれど、夜となく晝となく、朝に夕に、月雪花は、ものかは、神代の

ふることも、しほ沫のこれる國國の歴史、地理、動植物のことがらも、ひとつとして筆の林に生ひいでぬはなけれども、一きはなつかしく、わが敷島の大和にしきの色ふかき詞を、千しほ八千しほそめ〳〵て、紙屋川のながれ末ながく世につたふれはなりされは此の筆の勳功には、金鵄の勳章をも贈らまほしうなん。

伊藤清子

世の中に在りとある品々は、實に限りもなきものにや、われらの知り得たるもののみにても、其數いと多かり。そが中に、或は、其さまのいみじとて、もてはやさるもあり。あるは、其姿のうるはしとて、めでらるゝもあり。或は、其形の大きなるかため、尊ばるゝもありぬべし。獨筆や、其かたちも、其姿も、其さまも、さのみいみじからず、美はしからず、大きからず、たゞ細き竹のさきに、けものゝ毛をあまた集めて、作りなせるが常なりけり。あはれ此筆や、かばかりの物ながら、其はたらきのいみじきに至りては、げに何ものか之に及ぶべき。天地の開け初めしより、今日に至るまで、幾千年の間代々治しめし給ふ　天皇の、かしこき御惠のほどを仰ぎ奉り、又そが下ざまの者共のつくせる、くさ〳〵の功績抔知るを得て、我國ぶりをなつかしみ、益々いやさかりに榮え行きて、外國人をして、愈々我國の光りを仰がしめんと勵ましむるは、げに此筆のいさをなりけり。又親はらからなどの、遠く隔りたる處に行きて、見るべくも、語るべくもあらず、只如何に〳〵と案じ居たるに、親しく逢へりし如く、互に其さまを知るを得るは、げに此筆のいさをなりけり。學びのやをはなれて、片田舍に住ふわれらの、或はあちこちの出來事、あるは折につれて遷りかはるさまを知り、或は、名高き大人たちのさとしを仰ぎ、學びの海をあさるを得るは、實に此筆のいさをなりけり。あゝ筆のいさをや、いみじとも、尊しとも、稱へつべき言葉もあらずなん。うべも、かしこき御あたりにさへ、近く召させられ、又降りて鄙のわれらに至るまで、一日も其力をたのまぬはなく、諸人の口々より、文明の花を作ると稱へらるゝことよ。

山口やす子

筆は、竹に毛をはさめる、ことともなきさまなれと、そ

の人をたすけ、世にはたらく功績の程は、千鳥の跡にちなみある、濱のまさごの數にもましてればかりけり。千早振神世の昔しより、代々もさかえし其竹の、今の世にいたるまで、萬のことのはは、いふもさらなり、形となく影となく、あらゆるさまを、鏡にかけのうつるがごとくに、あかるき御代のくまもなく、文字てふ影はきえずして、久しくのこりあればこそ、深山のおくの山かつや、つゝうら〳〵の賤の男や、しほくむあまの少女子らも、かきならしたるもじ、不學うらにかひあらで、習のいそに玉をひろひつゝ、心のまゝにやさしくも、文字のかずをも讀みうるなれ。かくてぞ、海山遠く隔てたる親はらから、したしき友どちに、思ひのまゝをはこぶことも得るなる、あるは日々のこと、なにくれとかず〳〵かきしるすにも、この筆のわざにあらずば、いかでもいひあかすべきたつきあらん、されど、このほかにも、一々筆の功用のひろさのこりなくかきしるさんとせず、なほ日も亦たらずかし、故諺によれば、ふるき昔しの筆なき頃は、竹にきざみしるしゝとかや、もしそのまゝに世に筆てふものかつてなかりせば、昔より今も、世のありさまをうつすべき便術もなく、猶はあはれはかなきさまにぞ終りぬらんにあはれ幸ある物ごとの、日に月にすゝみゆく、いとめでたき今日の御代に遇ふことのいできにたるこそめでたけれ、あゝ筆なるかな、筆の世の人にめでらるゝも、ことわりになん。

なか〳〵に筆のたすけしなかりせば
かゝることゝ葉もいかでしるさん

武政常磐子

世の中に、いさをの多きものかずあれど、おほくは、この筆にまさるものはあらじ。描きなからも、思ふまゝをのべ、なつかしき遠國の友人などへも筆の力をかりて音信もし、又は口に云ひつくされぬ事も文をもて問ひ合するなど、郵便の有りとはいへど、第一筆の力にこそ、實に一日もかくへからざるものなり、さりながら、一朝筆にあやまり有る時は、中よき友もうとくなり、人の心も害はれ、己れの心を人に見らるゝものなれば、よく〳〵つゝしみて、筆はとるべきものと思ふになん。

三谷起美子

はころびそめたる園の梅をながめつゝ、ひとり思ひにしづみてありしが、折しも睦じき友の許より、ふとやかなる筆に、一ひらの紙を結びつけておこせられたり、

君がすむやどの清水に筆そめて
　　しづむ思ひをわれにしらせよ

と、ればろげにしたゝめたるは、正しくその人の手つきなり、思へど日比は忙しきに紛れて、おとづれもせでありけるものを、かなたこなたの心をなぐさむる筆の徳の尊さよと、伏しをがみつゝ、描きかへり事どもしつ。げに千里の外にも、思ひを通はせ、ふるき昔の事をも、幾千歳の後の世に傳ふるは、ひへに此筆のたふときふしよと思へど、人に生れなゝとがら、なす事もなき身の程の、筆にもいとゞ耻かくてなん。

名取正代子

凡そ世の中に、うれしく貴きもの、くさ〴〵あめれど、水莖のちからぞかり、いみじきはあらざるべし。いでや、千早ふる神代のさまを、今の世にのこせるも、はた古の聖の敎の、めでたき言葉の花の、今の世に匂へるも、又今時のいみじと思ふ事どもを、幾千歳の後に傳へんとするにも、皆これ水莖の跡ならではかなはぬなり。されど、此水莖の跡をし見れど、そのかみの見ぬ世の人をも友として、身を修め道を行ふべきは、いふも更なり、又幾千里の遠つ國の國柄などをも、居ながらにして知り得べく、將この世の中にありとあらゆる物事の、ことわりをもさとりつべし。實にうれしともうれしく、貴しとも貴きは、此水莖の千代に朽ちせぬ跡にぞありける。

鷹取政子

むかしの事讀きなされたる筆のあとぞ、時にあひて、見聞きたらん心地するが中に、親兄弟の書きのこされたる水ぐきのあとこそ、いとなつかしけれ。はた遠くはなれたる人の、折々の音信ぞ、其起臥の樣も知り得られて、うれしく、まいて、水ぐきのあとうつくしうかきなされたるは、見るにつけて、其人のしたはるゝものになん。

長山孝子

雲ゐなす遠き千里の外も、事のかず〳〵をおのか心のまゝにいひやり、今の世の事どもをも、後の世に

傳へ、又月日のしけかりける事をかきしるさんなど、筆なくてはかなふへしやは、このゆゑに、その上ふるき世より、梓弓いまの世にいたるまて、しもしもさりねず、人にもてはやさるゝものは、筆なるぞかし。されど、人の身の上にも、よく學ひ、よく行ひて、世にもてはやさるゝ事、この筆のごとく、あらまほしうなん。

鈴木まさ子

世の中にありて、一日として用あらざる物はなし、されど、筆の用こそ、またいみじけれ。五寸の竹管、五分の細毛なりながら、よく人を泣かしめ、笑はしめ、驚かしめ、歎かしむ。妾一日つれ／＼なるまゝに、名たかき文三ッ二ッ寫しゝに、忽ち筆禿をつけて、また寫すことかなはず。一をかけは二となり、硯上にて、數度こをころがし矯め直しゝも、つひに用ゆべからず。嗚呼筆にして若しなくぞ、其の不便なること、煩はしき事とも多かんめり、日々に往復する手紙も、わざ／＼又もて言傳せさせ、今世のありさま出來事なとを、後の世に殘さんにも、筆なくて、子孫に口傳へにしたらんには、なとて、文字なき大古に異ならんやは。

守山ひこ子

めつらしくいふへきことゝならねど、筆こそめでたきものなれ。折たふれ、月花を見て、こゝろに、あはれとおもほえしことゝも、水くきのあとにとゞめおきて、ほとへて、とりいたして見るこそ、ならその折のこゝちせられていみしけれ。かたゝかへしたる友に、ふみして、わかかたにありしことなとなにくれとかきあつめ、たはんわたりはいかにといひやりたるに、折につけたることゝもかへりことしたる、水くきのあとこそ、うれしくも又相見るこゝちせらるれ。はるかなるいにしへの事なとも、かきなかしたる水くきに、まのあたり見るこゝちそする、これ皆筆のいさをに、よるそかし。其の外、いひつくすへくもあらず、けにも水くきはかり、たのしくたふときものはよにあらし。

及川千尋子

萬代の遠き古の事をも、今まのあたり見るが如くに書き傳へ、今の世のさまをも、永く千とせの後に書きのこしてさながらその面影をとゞめ、あるは千里

の外に思ふ心をかよはせあるは、深き學びの奥かをも、貴き教の道の栞をも、明かに寫し出して、世を教へ、民を導くなど、多くは此の君の力をからぬこと稀なり。思へど、貴しとも、貴きは、此の君の力にぞありける。かく思ひつゝ、手にとりて、つく〴〵と打ちまもれど、げに打ち揃ひし命毛の、つやゝかに、うるはしう、しなやかなる中に、又錐の如き鋭き一かどをぞ、そのうらにものしたる。されどこそかばかりまめなる君にしあれど、一とたびその用ゐを誤れど、家をも破り身をもうしなひ、國の大事をもひき起ししためしいと多かるなれ。是を思へど、われ人共に、筆の林に遊ばんもの、謹みても猶謹むべき事になん。

矢島えい子

筆のめでいつくしまるゝは、其の形えんにやさしきが故にあらず、たゞ、其力の大なると、其身のなほきがためなり。遠き昔を、かき殘しては、學びもて、行く人の、道しるべとなり、ゐながらに、からもろこしの、國ぶりを、さとらしむるは、みな筆の力に、よれるなり、やんごとなき御前にも、薪こる山かつ、れだまくしづが、ふせ屋にも、かたざまなる心なく、其用をなさしむるは、そのなほきなりかし。この力と、この德とをつくし得て、終ふれだこそ、學びの庭の、師とも友とも仰がるゝならめ。よろづのものゝ、長として身の、つとめをつくしえず、終ふるものあるに、はづべきことにこそ。

二月
五日　歌……山家初春　文……雲を見て
廿日　歌……湖上懷　文……笑話

三月
五日　歌……餘寒　文……出産を祝ふ
廿日　歌……田家梅　文……樂しみ

四月
五日　歌……野遊　文……養蠶
廿日　歌……對花言志　文……臺灣へ出て立つ人をおくる

五月
五日　歌……新竹　文……新茶をおくられし返し
廿日　歌……夕水鷄　文……蛙を聞く

六月
五日　歌……曉郭公　文……雨中待友
廿日　歌……夏懷舊　文……朝顔

大八洲學會々員募集

（一）本會は神典歴史制度を始國語國文國歌等を研究し其の他地理風俗等古今の沿革を亮知するを以つて目的とす

（二）本會は國學家の一大團結にて成る者にして其創立は明治十九年にあり今や全國に會員三千名以上を有せり

（三）本會の機關として毎月一回刊行する雜誌には會員自由に論説歌文を登載するを得今や雜誌の刊行百廿六號に達し一回たりとも休刊せしことなし

（四）本會毎月の兼題和歌並に文苑部は本居豊穎先生の擔任にて先生親しく撿閲の上雜誌に登載する者とす

（五）本會々員は通信を以て各種の質疑及歌文の添削等を乞ふことを得

（六）入會せんと欲する者は宿所氏名年齢に入會金五十錢を添へ申込べし然る時は本會より會員の證牌を送附すべし

（七）會員は毎月本會より發刊する雜誌料として一ヶ年分金八十錢半ヶ年分ならば金四十五錢を前納すべし

（八）本會主唱者は本居豊穎木村正辭飯田武郷小杉榲邨故久米幹文翁等也

（九）本會賛成大家は千家福羽高崎丸山鈴木井上黒田伊藤内藤物集渡邉小出等の諸先生也

（十）規則入用の者は郵券貳錢を見本入用の者は五厘郵券十枚を送るべし

（十一）爲替振込は麴町飯田町郵便支局、郵券代用は一割増の事

通信專門講義錄 校外生募集

（一）本校は講義錄を以て國史（國法格式）國文國語を專修せしむ

（二）講義錄は前期十五冊後期廿冊を以て完結の期となし既に後期第十六號迄刊行せるを以て入會者の都合により何冊にても送本すべし

（三）學科並に講師は古事記、日本紀（飯田）神皇正統記（久米）近古史、土佐日記、枕草紙（小中村）萬葉集（木村）古今集、源氏物語（本居）竹取物語、徒然草（關根）法曹至要抄（井上）皇室典範（増田）近世史、日本制度通（萩野）美術史（小杉）德川百ヶ條（内藤）文典、假名遣（落合）等也

（四）學費は入學金五十錢月謝金貳拾錢但し一冊金拾錢宛の割爲替拂込は麴町飯田町郵便支局郵券代用は一割增の事見本入用の者は郵券十二錢を送れ

（五）大八洲學會並に大八洲學校の内一方に入學金を納めし者は他の一方の入會金を免除すべし

東京神田三崎町一丁目三番地

大八洲學校

總裁　小松宮御息所殿下
副總裁　鍋島侯爵令夫人

大日本女學會

有栖川宮御息所殿下

始め賛成員貴婦人方八十名

會員召集

●本會の目的は家庭敎育の本源たる女子敎育の普及發達を圖らんが爲め女子に必須なる學科を掲載したる講義錄を發行し小學卒業後入學すべき女學校の設け無き地方又は父母の許を離れ難き女子をして自修せしむるに在り其學科の程度は成るべく實用を主と、して平易に講述し務めて輕佻の風を避け一般婦人の智德を進め品位を高めん事を期す●講義錄は**女學講義**と名け其講述の周到懇切なる編成の優美高尙なる所謂花も實もある家庭の良師なりとは世上識者の定評也特に畏くも每卷**皇后陛下叡覽**の光榮を荷ひ且つ今般**御歌下賜**を辱うす●總べて講義の質問に答へ習字の添削批評を爲す●講習の學期を二ヶ年と定め每月一回二十五日に發行す其紙數は菊版二百頁以上にして每卷總裁殿下を始め貴婦人方の肖像を掲げ其他多數の圖書を挿入す

掲載科目及擔任講師

科目	講師
●修身	子爵 福羽美靜君
●國文	學習院敎授 關根正直君
●作歌	華族女學校敎授 坂正臣君
●地理及歷史	文學士 大森金五郎君
●理科	理學士 脇水鐵五郎君
●博物	理學博士 石川千代松君
●作文	城北中學校長 今泉定介君
●習字	御歌所勤務 大口鯛二君
●家事經濟	女子高等師範學校敎諭 後閑菊野君
●育兒	女子高等師範學校敎諭 後閑菊野君
●家庭敎育	三輪田眞佐子君
●生理及衞生	醫學士 吳秀三君
●看護	醫學士 吳秀三君
●禮法	女子高等師範學校敎諭 佐方鎭子君
●裁縫	渡邊辰五郎君
●割烹	東京女學館講師 田邊和氣子君
●活花	東京女學館講師 田邊和氣子君
●點茶	東京女學館講師 田邊和氣子君
●小說	依田學海君
●お伽譚	巖谷小波君
●詞藻	

●雜錄　●雜報

會費は東修卅錢月謝卅錢一年分前納三圓四十二錢二年分全六圓四十八錢●目下第十五卷迄發行、各卷共再版出來せり

●詳細なる會則は通知次第送呈すべし

東京市麴町區土手三番町廿八番地

大日本女學會

女鑑第百二十四號目次

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**銀座**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年一月十九日印刷
同　年一月三十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　同　川崎直衛
編輯人　同　山根勇藏
發行所（電話番號本局八八）國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）